

岩倉使節団・各省派遣理事官・随員（39名 24-62）

（名前、読み、生没年、出身、出発時年齢 出発時役職）

| | | | | | | | |
|----|-------|-------|------|-------------|-----|----|---------|
| 24 | 岩見鑑造 | いわみ | かんぞう | 1842 - 1904 | 幕臣 | 30 | 外務大書記 |
| 25 | 佐々木高行 | ささき | たかゆき | 1830 - 1910 | 高知 | 42 | 司法省理事官 |
| 26 | 山田顕義 | やまだ | あきよし | 1844 - 1892 | 山口 | 28 | 兵部理事官 |
| 27 | 田中光顕 | たなか | みつあき | 1843 - 1939 | 高知 | 29 | 大蔵省理事官 |
| 28 | 東久世通禧 | ひがしくぜ | みちとみ | 1833 - 1912 | 公家 | 39 | 宮内庁理事官 |
| 29 | 田中不二麿 | たなか | ふじまる | 1845 - 1909 | 尾張 | 27 | 文部省理事官 |
| 30 | 肥田為良 | ひだ | ためよし | 1830 - 1889 | 幕臣 | 42 | 工部省理事官 |
| 31 | 安場保和 | やすば | やすかず | 1835 - 1899 | 熊本 | 37 | 大蔵・租税権頭 |
| 32 | 若山儀一 | わかやま | のりかず | 1840 - 1891 | 東京 | 32 | 大蔵・租税権助 |
| 33 | 阿部 潜 | あべ | せん | 1839 - 不明 | 幕臣 | 33 | 大蔵・七等出仕 |
| 34 | 沖 探三 | おき | たんぞう | 1841 - 1912 | 鳥取 | 31 | 大蔵・七等出仕 |
| 35 | 富田保命 | とみた | のぶやす | 1838 - 1914 | 幕臣 | 34 | 同・租税権大属 |
| 36 | 村田新八 | むらた | しんぱち | 1836 - 1877 | 鹿児島 | 36 | 宮内大丞 |
| 37 | 長与専斎 | ながよ | せんさい | 1838 - 1902 | 長崎 | 34 | 文部中教授 |
| 38 | 中島永元 | なかじま | ながもと | 1844 - 1922 | 長崎 | 28 | 文部・七等出仕 |
| 39 | 近藤昌綱 | こんどう | まさつな | 1849 - 1894 | 幕臣 | 23 | 文部中教授 |
| 40 | 今村和郎 | いまむら | わろう | 1846 - 1891 | 高知 | 26 | 同上 |
| 41 | 大島高任 | おおしま | たかとう | 1826 - 1901 | 岩手 | 46 | 工部・鉦山助 |
| 42 | 瓜生 震 | うりゆう | しん | 1853 - 1920 | 福井 | 19 | 工部・鉄道中属 |
| 43 | 岡内重俊 | おかうち | しげとし | 1842 - 1915 | 高知 | 30 | 司法権中判事 |
| 44 | 中野健明 | なかの | たけあき | 1844 - 1898 | 佐賀 | 28 | 司法権中判事 |
| 45 | 平賀義質 | ひらが | よしただ | 1826 - 1882 | 福岡 | 45 | 同上 |
| 46 | 原田一道 | はらだ | いちどう | 1830 - 1910 | 幕臣 | 42 | 兵学大教授 |
| 47 | 吉原重俊 | よしはら | しげとし | 1845 - 1887 | 鹿児島 | 27 | 外務三等書記官 |
| 48 | 新島 襄 | にいじま | じょう | 1843 - 1890 | 安中 | 29 | 文部三等書記官 |
| 49 | 手嶋精一 | てじま | せいいち | 1849 - 1918 | 沼津 | 33 | 留学生随員心得 |
| 50 | 河野敏鎌 | こうの | とがま | 1844 - 1895 | 高知 | 28 | 司法少丞 |
| 51 | 鶴田 皓 | つるた | あきら | 1835 - 1888 | 佐賀 | 37 | 明法助 |
| 52 | 岸良兼養 | きしら | かねやす | 1837 - 1883 | 鹿児島 | 35 | 権中判事 |
| 53 | 井上 毅 | いのうえ | こわし | 1844 - 1895 | 熊本 | 28 | 司法中録 |
| 54 | 益田克徳 | ますだ | かつのり | 1852 - 1903 | 東京 | 20 | 司法八等出仕 |
| 55 | 沼間守一 | ぬま | もりかず | 1843 - 1890 | 東京 | 29 | 司法七等出仕 |
| 56 | 名村泰蔵 | なむら | たいぞう | 1840 - 1907 | 長崎 | 32 | 同上 |

| | | | | | | |
|----|------|-----------|-------------|-----|----|--------|
| 57 | 川路利良 | かわじ としよし | 1834 - 1879 | 鹿児島 | 38 | 司法・警保助 |
| 58 | 高崎豊麿 | たかさき とよまろ | 1836 - 1912 | 鹿児島 | 36 | 左院少議官 |
| 59 | 安川繁成 | やすかわ しげなり | 1839 - 1906 | 白河 | 33 | 左院少議生 |
| 60 | 西岡逾明 | にしおか ゆめい | 1837 - 不明 | 佐賀 | 35 | 左院中議官 |
| 61 | 小室信夫 | こむろ のぶ | 1839 - 1898 | 京都 | 33 | 左院少議官 |
| 62 | 鈴木貫一 | すずき かんいち | 1843 - 1914 | 彦根 | 28 | 左院中議生 |

24 岩見鑑造 (いわみ かんぞう) 1842—1904 幕臣 29 外務大書記

(写真未発見 編集中)

由利公正の随員・通訳として岩倉使節団の後発団員として参加。
狂歌師として晩年を送る。

天保13年生まれ。岩倉使節団に後発した大使随員・由利公正（東京府知事）の随員として加わった。使節団には、外務大書記の役職で参加したが、その前は、東京府二等訳官の肩書があるので、幕臣時代にどこかで、英学を学んでいて、由利に見込まれて随員を請われたものと思われる。

回覧中の行程は不明であるが、帰国後は新政府に参画することなく、狂歌師・茶人としての名を留めている。

狂歌師名・「多摩園巖美」として東京新銭座に住み、古面翁（こめんおう）に学び、狂歌「二葉連」の判者となっている。

明治10年（1877）『西洋諺草』（Henry Southgate）の訳術書を出版している。これは700余の西洋の諺を集めて、いろは順に並べたものである。

茶人でもあったようで、「茶の湯の復興と近代数寄者の台頭」の中に、石黒忠恵、安田善次郎、東久世通禧と共に名を連ねている茶会「和敬会」のメンバーとして、十六羅漢の一人とされる。

「所得税法注釈」書の中に、岩見鑑造—銀行役員に記述が見え、実業家の顔もあったと思われる。また、明治23年（1890）の読売新聞に「海運論—芝区の八紳士訴えられる…」に、八紳士の一人として、山崎清直と共に岩見鑑造の名があり、「国家将来像と陸海軍備を巡る海軍と徳富蘇峰」に依れば、当時「6年間で6艘の軍艦整備をめくり」旧幕臣と現役グループ（山県有朋、西郷従道）らとの間に論争があったらしく、岩見鑑造も、その論争に関与しているようなので、全くの風流人で過ごしたわけでもなさそうである。

(2014・11・29)

25 佐々木高行（ささき たかゆき）1830 - 1910 高知 42歳 司法大輔



明治維新の知られざる実力者 龍馬と大政奉還を建白

土佐藩上士・佐々木高順（100石）の二男として生まれる。幼名：弥太郎、松之助、万之助。名は高富、高春、信頼。生前に父が死去したことで48石まで家禄が逡減し、幼少期は貧窮の中に過ごす。剣術を麻田勘七に、山鹿流兵学を若山勿堂から、国学を鹿持雅澄に学んだ。尊王攘夷派の武市半平太と同門で親交を結ぶ。25歳で江戸に遊学、安井息軒に学ぶ。土佐に帰藩すると、郡奉行、普請奉行、大目付を経て、大監察に任命される。藩主・山内豊信（容堂）の側近として藩政をリードする。特に、土佐藩の尊王攘夷派と佐幕派の間のまとめ役を務め、土佐藩出先官参政として長崎に赴き、亀山社中（のちの海援隊）の監督の時、坂本龍馬と意気投合して活動をともしする。いろは丸沈没事件では、龍馬、岩崎弥太郎らと紀州藩と交渉して賠償金8万3千両を獲得。

慶応三年（1867）、6月上洛して後藤象二郎・坂本龍馬と薩土盟約の吟味及び大政奉還の建白を協議している。又、長崎に戻っては桂小五郎と会見。一朝事起これば長崎奉行所を襲撃して10万両奪取計画を立て戊辰戦争が始まると、龍馬亡き後の海援隊を率いて長崎奉行所を占拠している。海援隊と陸援隊双方の活動を支援して明治維新に貢献。

明治に入ると長崎裁判所参謀助役を皮切りに、参議、司法大輔、侍補を務め、岩倉使節団には司法省理事官として参加、欧米を回覧した。帰国後は宮中や元老院を舞台に谷千城や元田永孚らと共に「天皇親政運動」を主導して、明治天皇を擁して、伊藤博文ら政府要人の排除に動いたために、「中正党」（中道党）とも称された。

明治14年の政変で侍補を辞任するが、明治天皇の信頼と意向で空席のあった参議・工務卿に就任する。工務卿として、電話の創業を發議している。

明治17年（1884）、維新以来の功績により伯爵。翌年からは内閣制度の開始に伴い閣外に去り、以降宮中顧問官、枢密顧問官を務め、大正天皇や皇孫の養育主任を務める。神祇院再興運動（失敗）や敬神・尊王・愛国思想の普及に努める。明治29年（1896）皇典講究所（のち国学院大学、日本大学、近畿大学）の第二代所長に就任、再興に尽力する。明治42年侯爵。翌年病没する。天皇親政派の政治家として、薩長門閥政治を批判しながら、「薩長門閥派 vs 自由民権派」の対立による国内分裂を防ぐ調整役を務めた政治家でもあった。『保古飛呂比』（1830 - 1883 佐々木高行日記）は、有名な歴史資料。

（2015・6・9 『佐々木高行日記』、SeeSaa ブログ、他）

26 山田顕義 (やまだ あきよし) 1844 - 1892 山口 28 歳 兵部理事官 (陸軍少将)



小ナポレオンと言われた男 武から法へ

長州藩士・山田七兵衛顕行 (大組士、禄高 102 石、藩海軍頭) の長男に生まれる。諱：顕孝、のち顕義と改める。幼名：市之允。大叔父：村田清風、伯父：山田亦介。藩校明倫館に学び、のち松下村塾に入門。師・吉田松陰に「目力あり」と評価さる。文久 2 年 (1862) 上京し、藩主嗣子・毛利定広の警護を務める。高杉晋作、久坂玄瑞、志道聞多、井上俊輔、品川弥二郎らと御楯組血判書に連署。大村益次郎には兵学を学ぶ。長州の諸戦・禁門の変、下関戦争、俗論派との功山寺決起、第二次長州征伐などに転戦する。鳥羽伏見の戦い以降、新政府軍陸軍参謀兼海軍参謀として戊辰戦争を戦う。

明治 2 年、太政官制で兵部大丞に就任、長州藩少参事兼任となり、山口へ凱旋、顕義と改名する。維新の軍功で永世 600 石の禄を下賜される。大村益次郎の暗殺未遂事件で、病床の大村より日本近代軍制創設の指示を受け、『兵部省軍務ノ大綱』を太政官に提出。大村の継承者として、大阪兵部省の確立と東京本省を掛け持ちする。明治 3 年、井上馨の養女・竜子と結婚。明治 4 年、陸軍少将に任命され、兵部省理事官として、岩倉使節団に随行する。アメリカで使節団と別れ、原田一道ら兵部省一行と、フィラデルフィア海軍施設視察したあと渡仏。パリを中心に、ベルリン、オランダ、ベルギー、ロシアなど欧州各国で軍制を調査し、ウィーン万博を見て帰国の途につく。

明治 6 年、帰国後の理事官功程に「兵は凶器なり、抵抗の器なり」を提出し、徴兵令の延期を求める。その後、東京鎮台司令長官に任命されるが、すぐ解かれて清国特命全権公使に任命されると、解任を主張。折しも佐賀の乱が起きて、その鎮圧に回され、清国公使は自動的に解任さる。陸軍少将兼務で、司法大輔に就任、刑法編纂委員長となる。

西南戦争勃発で、再び鎮圧に出征。明治 12 年にも、刑法草案審査委員や陸軍中将、参議兼工務卿、憲法草案「憲法私案」など軸足を次第に陸軍から法へ移し、明治 14 年参議兼内務卿を経て、司法卿兼参議に就任する。明治 18 年、第一次伊藤内閣から、黒田内閣、山縣内閣、松方内閣の司法大臣を歴任して、その間、民法、商法、刑法などの編纂事業に携わる一方で、大日本私立衛生会会頭や、関西法律学校、皇典講究所 (のち国学院) や日本法律学校 (のちの日本大学) の創設に関わる。明治 24 年の大津事件を契機に司法大臣を辞任。以降、枢密顧問官に就任、生野銀山視察中に卒倒し、49 歳で逝去する。パリで、軍事の天才、民法典の編纂者として、ナポレオンを崇拜、自身も「小ナポレオン」と称された。山縣有朋との角逐があつて司法に転じたとも言われ、神仏分離を廃し、神道は非宗教と決めた。(2015・6・10、『山田顕義』泉三郎講演)

27 田中光顕（たなか みつあき）1843 - 1939 高知 29歳 大蔵省理事官



明治の黒幕的巨魁。長寿全うした官僚政治家

土佐藩家老・深尾家家臣の浜田金治の長男として土佐に生れる。初名：浜田辰弥。通称：顕助。号：青山。もう一つ、田中充美の子で田中顕助との二説あり、真相不明。

土佐藩士武市半平太の尊王攘夷運動に傾倒してその道場に通り、土佐勤皇党に参加した。叔父の那須信吾は吉田東洋暗殺の実行犯だが、光顕も関与の疑いもある。文久3年（1863）の土佐勤皇党の弾圧を契機に、那須信吾らと脱藩して長州藩を頼って、高杉晋作の弟子になる。第一次長州征伐後に大阪城占領を計画したが、新撰組の摘発で果たせず、大和木津川へ逃れる。薩長同盟の成立に関与し、薩摩藩の黒田清隆が長州を訪ねた際に同行している。第二次長州征伐では長州藩の軍艦・丙寅丸に乗船して幕府軍と戦う。後に土佐に帰藩して、中岡慎太郎の陸援隊に幹部として参加する。慶応3年（1867）、中岡が近江屋事件で坂本龍馬と共に暗殺されると、副隊長として陸援隊を率いて、鳥羽・伏見の戦いで高野山を占拠して紀州藩を威嚇、戊辰戦争で活躍する。維新後は新政府に出仕し、岩倉使節団では大蔵理事官として参加し、回覧費用50万ドルの会計を一手に引き受ける。南貞介の銀行破産事件にも、田中の堅実さで公金の被害はなかった。帰国後の西南戦争では征討軍会計部長を務め、明治12年（1879）には、陸軍局会計部長、のちに、元老院議官（1885 - 1889）、初代内閣書記官長（1885 - 1888）、会計検査院長（1887 - 1888）、警視総監、学習院院長などの要職を歴任する。明治20年（1887）子爵となり華族に列する。明治31年（1898）から、連続11年間、宮内大臣を務め、同じ土佐出身の佐々木高行、土方久元らと共に、天皇親政派の宮廷政治家として大きな勢力を持った。明治40年伯爵に陞爵。明治42年、西本願寺別荘買い上げ収賄疑惑で辞職し政界から引退するが、97歳の天寿を全うする。従一位勲一等。

西園寺公望が晩年「日本の社会は田中によって支配されている」と意味深な発言をしており、宮中某重大事件や血盟団事件（1932年の三井・団琢磨暗殺一犯人・井上日召と親交あり）へ関与の疑いも持たれ、更に頭山満（玄洋社）、内田良平（黒竜会主幹）、田中智学（国柱会創始者）らとの親しい交友関係があり、二・二六事件犯人の青年将校たちの助命嘆願をしたことから、これら事件の黒幕的人物との見方もある。

高杉晋作『東行遺稿』出版や、日本各地の維新烈士の顕彰や、遺品遺墨の蒐集。日本漆工会会頭。久能山東照宮の修理等文化事業にも関与した。茨城県大洗町の常陽明治記念館（幕末と明治の記念館）、旧多摩聖蹟記念館、高知県佐川の青山文庫に蒐集品が寄贈されている。晩年「古溪荘」（富士市）、「宝珠荘」（静岡市）、小田原別荘（現小田原文学館）等の別荘に隠棲した。口述回顧談『維新風雲回顧録』、『維新夜話』、『憂国遺言』の著作あり。（2015・6・21 ブログ『日本の本当の黒幕』等）

28 東久世通禧 (ひがしくぜ みちとみ) 1833 - 1912 公家 39歳 宮内庁理事官



急進派の公卿・神戸事件で外交デビュー。実質初代北海道開拓長官。

天保4年(1833)、正5位下・東久世通徳の子として京都で生まれる。幼名：保丸。号：竹亭。古帆軒。東久世は村上源氏久我流8家の分家。岩倉具視と同族で、蔵米30石3人扶持の下級公卿であった。10歳で、2歳年上の皇太子・統仁親王(孝明天皇)の遊び・手習いの相手役をした。1849年孝明天皇の侍従となり、1862年国事御用掛。

文久3年(1863)国事参政して、尊皇攘夷派公家として活躍するが、同年の8月18日の中川宮と薩摩・会津藩による政変によって、朝廷の実権が尊攘派から公武合体派に移ると七卿落ち(三条実美、三条西季知、澤宣嘉、壬生基修、四条隆謨、錦小路頼徳、東久世)の一人として、船で長州に逃れる。元治元年(1864)には、長州から大宰府に移るが、その際、東久世は長崎に赴き、公卿として初めて軍艦に乗り、兵器に接する。

慶応4年(1868)、王政復古により復権を果たし、外国事務総督の一人となり、神戸事件(岡山藩兵とフランス水兵の発砲事件)の対応責任且つ天皇親政の代表公卿として公卿初の外交交渉に当たる。天皇親政になったことを宣し、日本側犯人を切腹させることで事件を決着させ、外国側より決断と判断力に優れた外交官と認められる。その年、神奈川裁判所総督(のち神奈川県知事)を務め、翌年明治2年には、第二代開拓長官(第一代鍋島直正は実務の前に辞職。実質初代)として、開拓使吏官、農工民約200名を伴い、英国船“テールス号”で函館に赴任し、着任後開拓の中心を函館から札幌に移して開拓の事業を始動させた。この年、王政復古の功績で賞典禄1000石を給されている。

明治4年、明治天皇の侍従長に転じて、岩倉使節団に宮内庁理事官として参加して、各国の儀礼などの調査にあたる。

帰国後は、明治15年(1882)元老院副議長。華族令施行で、明治17年に伯爵に叙される。本来の東久世家の家格は羽林家・子爵相当なので、明治維新の功績の評価である。維新の功績を評価されたのは、この時点で岩倉具視と三条実美などと多くない。

明治21年に枢密顧問官。明治23年に貴族院副議長。明治25年、枢密院副議長を歴任した。

著作に『東久世通禧日記』『中学国史』『尋常小学終身書』述編著に『花影暗香』『竹亭回顧録・維新前夜』共著に『孔子之聖訓』歌集『竹廼舎歌集』等がある。

「庭の面のこそ(去年)の古根の菊のはな おのか(が)ままにも花咲にけり」

「さくらはな 咲の盛にてる月のかげもみちたり あくるまでみむ」

(2015・6・22、『財界さっぽろ』、ほか)



文部省『教育令』を出したが一転、司法卿・駐伊・駐仏公使へ

尾張名古屋城下で尾張藩士の子に生まれる。号：夢山。名：不二麻呂とも表記。藩校・明倫館で和漢古典を学ぶうちに尊皇思想に心酔し、成績優秀で藩参与に取り立てられる。藩内が尊皇攘夷か佐幕かで意見二分する中で、尊攘「金鉄組」に属する。徳川御三家という立場にも拘らず、田宮如雲、丹羽賢、中村修(のちの名古屋市長)らと尊皇攘夷建白書を家老や要職者に出し、京では尊攘論者と接触した。青松葉事件以降、実権を握った徳川慶勝の右腕となって藩論の統一に尽力し、慶応4年の王政復古の大号令を受けて参与となり、小御所会議に尾張の代表として出席した。

明治3年、阿波で稲田騒動が勃発すると、特命で派遣され、迅速な鎮定を図った。

明治4年、文部省が創設されると文部太丞となり。文部省理事官として岩倉使節団に随行する。アメリカでアマースト大学に留学中だった新島襄を通訳兼助手として、欧米の教育事情を調査して、帰国後、新島の協力を得て文部『理事功程』15巻を著す。これは岩倉使節団の諸『理事功程』の白眉とされる。明治6年、文部省三等出仕、正五位、文部少輔に、明治7年文部大輔となる。外務卿・陸奥宗光と共に、来日のメキシコ天文観測隊を歓待し、近代日墨国交の端緒を開く。明治9年、フィラデルフィア万博の視察を兼ねて再渡米し、アメリカ各州の教育行政の調査を実施、翌年、帰国。

明治12年、「教育令」を建白、明治5年の学制は廃止される。学制は、箕作麟祥ら洋学者が中心になって、フランス式全国規模の単線方式の画一的で、民生圧迫型のきらいがあった。「教育令」は思い切ったアメリカ型の自由主義教育を取り入れたもので、地域分権化と就学期間の弾力化を狙ったが、これが、天皇側近グループや地方官からの学力低下の批判を受けて、田中は明治13年に司法卿に配置換えとなってしまう。

田中は音楽取調掛を設け、伊沢修二らを欧米に派遣し、「蝶々」「雲か霞か」「ローレライ」などドイツ民謡を教育に取り入れるなど音楽教育の近代化や、体操伝習所を設置し、近代体育教育の導入、女子校や幼稚園の開設にも尽力した。

後任の文部卿・河野敏謙により田中の「教育令」は「改正教育令」に変更される。

司法卿へ転出の後、参事院議官、駐イタリア公使(1884-)、駐フランス公使(1887-)、枢密顧問官を経て、明治24年(1891)、藩閥色を薄めるためにと、薩長出身以外からの伊藤博文・山県有朋の要請で、第一次松方内閣の司法大臣を拝命する。明治29年には、条約改正発行の準備のため、改正条約施行準備委員会副委員長に就任する。

勲一等旭日桐花大綬章。子爵。明治42年、65歳で死去。《民衆自奮を待つ》が信念。

(2015・6・24)

30 肥田為良（ひだ ためよし）1830 - 1889 幕臣 42歳 工部省理事官



咸臨丸機関長、日本造船の父



咸臨丸で

伊豆の医師・肥田春安の五男として生まれる。諱：為良。通称：浜五郎。

葦山代官江川英龍の手代見習いとして、伊東玄朴に蘭学を学ぶ。幕府が開いた長崎海軍伝習所に、江川塾より第一期の榎本釜次郎、小野友五郎について、安政三年（1856）、肥田は第二期研修生として参画し機関学を修めた。安政六年（1859）軍艦操練所教授方出役となる。万延元年（1860）新見遣米使節団の別船仕立て船『咸臨丸』に乗船し、蒸気方（機関長）として、山本金次郎（副長）、岡田井蔵、小杉雅之進（機関方見習士官）を率いて太平洋往還を成功に導いた。航海中、船酔いで役立たずの艦長・勝海舟に代り、機関方の肥田、小野友五郎（測量方）、浜口興右衛門（運用方）と中浜万次郎ら日本人と、同船したブルック大尉ら11名の米国人乗組員の操船で無事航海に成功した。

帰国後、文久元年（1861）軍艦操練所頭取手伝出役を経て、軍艦頭取出役となる。文久2年、幕府軍艦としては最初となる蒸気軍艦千代田形の蒸気機関を設計する。文久3年、小十人格軍艦頭取、海路上洛する徳川家茂の御座船翔鶴丸艦長を務める。元治元年（1864）両番格軍艦頭取となり、彼の推奨した石川島造船所の工作機械を購入の為、オランダに派遣され調達に当る。当時のオランダには、長崎海軍伝習所で旧知の榎本釜次郎、澤太郎左衛門、内田恒次、田口俊平、赤松大三郎らが軍艦『開陽丸』の艤装と研修に滞在し、他に法律の津田直一郎、西周助、医学の伊東方成、林研海もいた。幕府は肥田の出張中に、フランスとの契約により横須賀造船所に方針を変更し、その資材調達の為、柴田日向守一行を渡仏させ、後に技師主任となるレオンス・ヴェルニーと打ち合わせ中で、肥田もフランスで合流する。帰国後、慶応2年、軍艦役に、慶応4年に軍艦頭に昇進、富士山丸艦長を務めた。

維新後は、静岡藩海軍学校頭を務めるが、明治2年民部省出仕となり、明治3年、土木正、正七位、工部少丞、造船頭兼製作頭となったところで、岩倉使節団の工務省理事官として随行、欧米各国を歴訪し、造船、港湾、鉱業の調査に当る。帰国後、工部大丞、海軍大丞兼主船頭を経て、明治7年海軍少将となる。この間、明治5年に、造船所は工部省から、兵務省が分割した海軍省管轄となり、以降横須賀造船所の完成に向け、主船頭頭、横須賀造船所長、主船局長を務め、完成を見た明治9年に海軍省を退官する。

その後、機関総監、海軍機技総監、宮内省御料局長官を歴任。理財に長じた肥田は、皇室財産の保全を期す一方、華族銀行や日本鉄道の設立運営に関与した。

明治22年（1889）、藤枝駅で走り始めた列車に飛び乗ろうとして転落、轢死した。（2015・6・26、『日本鉄道の父・肥田浜五郎』（土屋重明）

3 1 安場保和（やすば やすかず）1835 - 1899 熊本 37歳 租税権頭



豪傑・無私の政治家 近代国家の基礎整備 後藤新平の岳父

熊本藩藩士・安場源右衛門の子として熊本城下に生まれる。幼名：一平。号：咬菜軒。8歳で藩校：時習館に入り、選ばれて居寮生となった。横井小楠の門下生として、嘉悦氏房、山田武甫、宮川房之らと並ぶ四天王と称される。「横井小楠の唯一の弟子」（勝海舟）「岩倉や伊藤より偉かった」（頭山満）の評価も。幕末、小楠の実学党に属し、佐幕藩から王政復古支持へ藩論を変えさせた功績で、後に華族に列せられ男爵となる。

戊辰戦争に参加し、明治2年、徴士として新政府に参加に任じられ、胆沢県（水沢）大参事として赴任。後藤新平、斉藤実、山崎為徳など地元の俊英な少年5名を見出し、県庁給仕とする。明治3年、酒田県大参事。明治4年熊本藩少参事として、古巣で廃藩を進め、西郷の推薦で大蔵大丞・租税権頭に任じられる。直後、大蔵大輔・大隈重信弾劾を企て否決されるが、その結果政府内部分裂の危機から、廃藩置県による政府内再結集の動きにつながる。岩倉使節団には大蔵理事官・田中光顕の随員で参画するが、頑固者で、硬骨漢な論客を遠ざけようとの大隈・井上馨の意向が働いたとも言われる。だが、安場はワシントンから、単身帰国してしまう。英語も通じず、欧米風になじめない自分は経費の無駄使いという理由だ。頼りの大久保が天皇の親書を取りに帰国、孤立していたとも言われる。帰国すると福島県令となる。政府に7000円を申請し、安積原野の開墾にオランダ人技師・ファン・ドールンを招いて安積疏水を作り、殖産興業（機械製紙工場建設）や、福島洋学校・那須川医学校や厚生・文化・運輸・交通・通信の整備を推進した。明治8年には、愛知県令に転じ、名古屋城金鯱を復歸させ、明治用水を整備し、伝染病対策を講じ、愛知医学校長兼病院長に後藤新平を抜擢する。後藤は安場次女・和子と結婚したので、安場は岳父となる。明治13年（1880）－明治18年（1885）は元老院議官。この時代、根室～千島列島・シムシム島を踏破して「千島警備及び北海道開拓意見書」を参議・伊藤博文に提出。これが評価され、のち明治30年には北海道庁長官に任じられている。その間、明治19年には福島県令として、九州鉄道建設を発起し、筑後川改修、門司築港を手掛ける。明治25年、福岡県知事の時、第2回衆議院議員総選挙で選挙干渉したと辞任させられるが、その後、参事院議官、貴族院議員や国民協会幹事長などを歴任している。酒を好み、談楼風発、古武士風で、硬骨漢。どうやら中央政府からは絶えず遠ざけられた模様だが、全国各地での地方行政に於いて、鉄道、治水、産業育成など日本の近代国家の基礎整備に多大な貢献をした人物である。

（2015・6・27、『安場保和伝 1835 - 1899』ほか）

32 若山儀一（わかやま のりかず）1840 - 1891 東京 32歳 租税権助



明治前期の碩学・実証的経済学者の草分け

天保11年（1840）江戸の旗本・医師・西川宗庵の子として生まれる。別名：元正。緒方正。儀一（ぎいち）。隆民。緒方洪庵に医学・蘭学を学ぶ。秀才の誉れ高く、洪庵に緒方姓を名乗るのを許され、一時“緒方正”を使うがのちに儀一に改める。明治4年6月以降、若山家に養子に入り若山姓に改称する。時代の見極めが早く、夙に医学を捨て英学の習得に進む。幕末は幕吏として、外国貿易関係事務に従事していたようだが、明治元年、開成所3等教授となる一方で、フルベッキに就いて経済学を学ぶ。

明治4年には改めて大学出仕を命じられ、大助教に任じられ、同年5月民部省地理権正、同7月大蔵省租税権助となる。そこで岩倉使節団の戸籍頭・田中光顕理事官の随行に決まり、翌5年5月国租事務取調方として、大蔵代理事官心得を以て欧米諸国における研究を命ぜられ、10月更に、米国ニューヨークにおける紙幣並びに国債刊揚事務監督を命ぜられた。結局、明治7年に帰国するまでの3年間、欧米で税務・財政の研究にあたる。帰朝後は太政官租税助、正六位となり、宮内省にも勤めるが、「保護貿易」「税制改革」「土地制度」などを持論として提唱した。

明治10年一旦官を辞して、日本で最初の生命保険会社「日東保生会社」を設立するが、明治14年再び、太政官権大書記官兼農商務権大書記官に任じられる。民間に在った明治11年から13年にかけて大蔵卿の大隈重信に12通もの書簡を出しており、色々と建策していたようだ。明治16年、宮内省御用掛兼務し、編集局編集委員を務めている。明治17年参事院議官補となる。明治21年、従五位。

帰国後は、多数の訳書・著作を手掛けている。主なものに『官版経済原論』（1869—箕作麟祥と共訳のペリーの *Elements of Political Economy* の部分訳）、卓見に富む地租税制改革論『革税説』、『泰西農学』、『保護税説』（1871）、自説である保護貿易論『自由交易穴探』（1877—バイルズの *Sophisms of Free Trade and Popular Political Economy Examined*）、先駆的な『分権政治』等優れた著作が多い。彼の著作は、昭和になって注目され、昭和9年12月に大蔵大臣官房文書課より『明治前期の碩学若山儀一氏の遺著について』が刊行されている。内容は「士族授産私議に就いて」「わが国における生命保険業の主唱と先駆」「明治維新政府成功の要素」「明治初年於ける注目すべき地租改正論」「我国における科学的生命保険業の興」などから、彼の功績を顕彰するものであることが分かる。

英国女性と結婚し、国際結婚第二号ともいう。

（2015・6・27 ことば辞典、『明治前期の碩学・・・』）

33 阿部 潜（あべ せん）1839—没年不明 幕臣 33 大蔵省七等出仕

（写真未発見、編集中）

沼津兵学校創立の立役者 尾去沢鉦山、

幕臣・阿部遠江守正蔵の三男として江戸に生まれる。阿部正外の弟。曾根家に養子に入って曾根邦之介を名乗っていたが、元治元年、兄・正外が奥州白河の阿部家養嗣子になったのを機に、阿部家に戻り家督を継ぐ。蕃書調所に勤める。

慶応3年、寄合より目付に昇進。陸軍重立取扱いとなる。幕府時代には、陸軍奉行にあたる陸軍頭として『陸軍解兵御仕方善』を著す。市川・船橋で官軍と抗戦する。

江戸城開城の直前に、江戸城の金蔵より11万両を盗み出して、沼津兵学校の創設の資金とする。沼津兵学校は、江原素六と企画して、西周を兵学校頭取に招いて、田邊太一、原田一道ら20名を教授陣に招聘して開設した。一説では、沼津兵学校で、幕府軍隊の復活を狙ったともいわれるが、新政府兵学校と合併で、3年半しか続かなかった。

明治2年、沼津奉行、静岡藩少参事兼軍事掛となる。

明治3年、芸州に招聘されて、「御貸し人」として、広島藩兵学校設立顧問となるが、更に薩摩藩の市来四郎に招かれて、鹿児島兵学校創設に向け、鹿児島赴任のため軍事掛少参事を逸職。この起用には、大久保利通も関与していると言われる。

明治4年、大蔵省七等出仕・大蔵省勸農寮（1871—72）所属となって、岩倉使節団に随行する。使節団では耕牧事務取調書類をされて、若山儀一、沖 守固、岩山敬義、由良守慶、野口富蔵らと同役である。アメリカのフィラデルフィア以降、肥田理事官の別働隊として、視察にあたった。

明治5年11月パリに滞在した成島柳北の『航西日乗』には、阿部潜（ひそむ）は、ホテルドロールビロンに佐藤鎮雄、池田寛治、大野直輔らと滞在しており、阿部は、11月4日日本に帰国と記されている。岩倉使節団は、11月16日英国からパリについているので、使節団に先行して欧州に至り、使節団のパリ到着前に帰国したことになる。

帰国後の、阿部の動向はあまり伝わらない。

明治9年から20年にかけて尾去沢鉦山の経営に深くかかわる。

明治30年大葛鉦山の官業払下げを受けているとの説もあるが、没年も不明である。

多くの幕臣出身の使節団員は、次第に新政府の方針と合わずに官業から疎遠になっていくようである。阿部もその例に漏れない。

（2014・11・27）

34 沖守固（おき もりかた）1841 - 1921 鳥取 31歳 大蔵七等出仕 大蔵随行



江戸の絵師 政治家となり近代日本を駆け抜ける

鳥取藩士・江戸詰絵師沖一峨の長男として江戸藩邸内で生まれる。幼名：鶴、貞一郎，探（丹）三。号：九臯。父から狩野派の画を学ぶ一方で、漢文を萩原緑野、大橋訥庵に学ぶ。文久元年（1861）父の死で沖家8代目を継ぐ（30俵5人扶持、年銀20枚）。文久3年、御国勝手を命じられ鳥取に移住、藩主の供として上京し、そのまま京都に逗留し禁門の変前後の斡旋方として、鳥取・京都間奔走する。弟剛介は長州征伐派の目付を暗殺し切腹の連座で家名断絶となり、一時守固も親戚預りとなるが、慶応2年（1866）尊皇攘夷で藩政がまとまり家名再興を果たす。

明治元年に、西園寺公望・山陰道鎮撫使来藩に際し、松田正人（道之）らと御用掛として応接に当る。その後藩の公議人となり、京都御留守居役として、新政府との交渉にあたる。明治2年、徴士として新政府に出仕。鳥取藩少参事、権大参事を歴任。明治4年岩倉使節団の田中光顕理事官随行を命ぜられる。一行とはアメリカで分れ、自費留学として英国に向かう。以降7年間英国留学する。

明治11年に帰国すると、内務省少書記官となる。翌年、群馬県大書記官に、翌々年は外務省少書記官・会計局長に任じられる。明治14年（1881）に、野村靖の後を受けて、神奈川県令となり8年間務めたあと、明治22年12月に長崎県知事を拝命するが何故か着任せず、12日間で辞任している。直後の明治23年1月から元老院議官となっているので、恐らく単なる配置換えになったものと思われる。同年、帝国議会開設に伴い貴族院勅選議員に任じられ、死去するまで在任している。次いで明治24年、滋賀県知事に就任したが、折から発生した大津事件の巻き添えで、2か月で戒告免職となっている。更に、和歌山県知事（1892 - 97）、大阪府知事（1898）、愛知県知事（1898 - 1902）を歴任し、明治33年（1900）には男爵に叙せられた。明治36年には錦鶏間祇候に任じられる。Lroin Norah（ノラ）の手紙6通が残されている。関係は不明。

結局、沖守固は日本と西洋、封建と近代、文化（絵画）と政治、中央と地方の二つの対立項を渡り歩いた人物と言えそうである。英国でのスケッチ帖を残し、書画も多く残っている。守固の母親・沖千代（延月）は、子供たちを厳格に育て、読書を強い、儉約を旨とした。明治40年90歳になった千代は、皇后陛下に拝謁し、2カ月後に死去した。守固も、その5年後の大正元年に亡くなっている。

（2015・6・28『旧鳥取藩士男爵沖守固家資料』他）

35 富田命保（とみた のぶやす）1838—1914 幕臣 34 大蔵理事随行租税権大属

（写真未発見、編集中）

渋沢栄一の推薦で新政府役人に、生涯に亘り親交あり

天保9年、幕府御普請役格御代官手付：富田命孝（後箱根奉行支配調役）の長男として馬喰町に生まれる。江戸期は富田達三、明治期は富田冬三とも名乗る。

幼少時、儒学者荻原緑野に学び、その後、昌平黌に学ぶ。万延元年（1860）、外国奉行書物御用出役となる。文久元年（1861）外国奉行水野忠徳の小笠原島調査団に随行し、島の調査に当り、同年に、また外国奉行柴田剛中（貞太郎）に随行し、横須賀製鉄所の機材調達のため、福地源一郎、塩田三郎、小花作之助、水品楽太郎らとフランス、イギリスを訪問する。大政奉還後は、徳川家達に随いて静岡に移住した。

明治3年、民部省に出仕。渋沢栄一の改正掛に赤松則良、杉浦愛蔵、塩田三郎らと参加するが、同年大蔵省に移動となる。

明治4年から明治7年まで、大蔵理事官随行員：租税権大属として、岩倉使節団に加わる。これは渋沢栄一の推挙によるものであった。

帰国後は内務省勸業寮に属して七等出仕。この頃に、使節団と共に、サンフランシスコで駐米英国領事から聞いた「アッサムの製茶事業が世界で最も進んでいる」との情報を、産茶協会に流した所、早速、同協会はインドのアッサムに3名の専門家を送り、その結果、日本の製茶事業が躍進し、輸出にも貢献したと言われる。明治10年には内務省書記官となり、「会社並びに組合条例審査会」（総裁：山口尚芳）などに参画している記録が残る。

明治14年に農務省に移り、工務局長を拝命している。

明治20年（1887）「英国綿製品輸入実績調査」を渋沢栄一に依頼して回答を得ている記録があるが、どんな活躍をしたかは分からない。

明治22年、前田正名に工務局長をゆずり非職免官となった。理由は分からないが、東京専門学校の設定に、明治15年に小野梓らと関わり、後に早稲田大学の初代学長となった高田早苗の存在があるかもしれない。高田の母は、富田命保の姉・文子であり、憲法発布後の初の民選選挙に出馬が予定されていたのである。2年後の明治24年、政府を辞している。大正3年に死去した。

高田早苗の母は、富田命保の姉であり、高田は、富田冬三の家の下宿していたころ、富田から「これからは、英語と世界事情を良く勉強するように」言われたと回顧録にある。（2014・11・28）

36 村田経満 (新八) (むらた つねみつ) 1836 - 1877 宮内大丞 36歳

鹿児島 東久世通禧の随行員



西南戦争で西郷に殉じた西洋文化を愛した男

歴史的人物には、若しこの人があの時死ななければと思う人物がいる。村田新八もそんな男のひとりだろうか。岩倉使節団先発隊には薩摩出身は大久保利通と村田新八だけだった。(現地参加の畠山義成、吉原重俊、後発隊の川路利良、高崎豊麿も薩摩藩だが)

村田は薩摩藩の高橋良中の三男として高橋八郎として生まれ、村田十蔵経典の長女・清と結婚して、のちにその姓を継いで、村田新八(経麿、経満)となる。父方の従兄弟に前田献吉・前田正名兄弟と共に、フルベッキの助けで英和辞典を上海で印刷した高橋新吉がいる。新吉は前田献吉と共に明治4年1月に渡米していて、岩倉使節団で随行した大久保利通の息子二人の面倒をアメリカで見ている。村田新八は、従兄への敬愛もあって、岩倉使節団に東久世通禧・侍従長の宮内省理事官随行として、宮内大丞として参加する。西郷隆盛を敬慕し、西郷が遠島となった喜界島に連座して、そこで子供に学問や武術を教えた。後には戊辰戦争でも軍功を立てた。渡米の船中では、開明派が西洋流食事作法を教えようとする、村田新八ら保守頑固党の一派は、わざと日本流を貫いて抵抗したと言う。西洋流の服装に変えた団員を見て、「洋装しても、精神の向上が伴わないと猿まねに過ぎぬ」と批判したが、パリでは燕尾服を新調して、美術館、芝居やレストランめぐりをし、西洋音楽にも親しんで、アコーディオンを求めて習うなど、次第に欧化に馴染んでいく。宮内省メンバーでありながら、1872年3月から4月の肥田為良・工部省一行と共にフィラデルフィア視察に参加し、滞米中の従兄の高橋新吉に学校を案内してもらい、州の招宴では、新八が英語でスピーチしている。このあと、条約交渉で長引いたので、宮内省理事一行6名は、村田を含めて欧州に一足先に向かい、英、独、露、伊、オーストリアを調査旅行し、あとはパリで自由を楽しみ、高崎正風や島地黙雷ともよく会っている。ジュネーブでは留学中の大山巖にも会いに行っている。1874年1月初旬帰国するが、頼みの大久保は忙しくて会えず、黒田清隆を通じて話したのみで、そのまま鹿児島の西郷の処に帰ることになる。これが彼の生涯を決めて、西南戦争まで鹿児島にとどまり戦死する。大正5年に正五位に叙されている。彼の長男・岩熊(十蔵)は黒田清隆の薦めで、開拓使派遣メンバーとしてアメリカに留学したが、西南戦争で戦死、次男も負傷、幼かった三男・十熊が家督を継いだ。

(2015・3・7 ブログ『村田新八への足跡を追って』ほか)

37 長与専齋（ながよ せんさい）1838 - 1902 長崎 34歳 文部中教授



西洋医学への道の先駆をなし医療福祉・公衆衛生行政の創始者

肥前・大村藩医・長与俊達の養子長与中庵の子として生まれる。父中庵は漢方医・楽春法印の弟子で漢方医を守ったが、専齋4歳で父が亡くなると、義祖父俊達に育てられ緒方洪庵の適塾に入門し、やがて福沢諭吉の後を継いで塾頭になる。のち大村藩侍医に。

文久元年（1861）長崎の医学伝習所で、オランダ人医師ポンペ（1832 - 1912、1866年来日して熊本医学校で北里柴三郎など教え、京都府療病院、大阪府病院で務めて、明治12年に帰国）の下で西洋医学を修める。その後、ポンペの後任のボードウィン（1866から14年間在日のオランダ海軍軍医）とマンスフェルトに師事し、医学教育近代化の必要性を教えられる。明治元年、長崎精得館（長崎医学校）の学頭に就任。マンスフェルトと共に、自然科学を教える予科と医学を教える本科に区分する学制改革を行う。

明治4年、文部少丞兼中教授として、岩倉使節団の文部理事官・田中不二麿に随行して欧米を回り、主としてドイツ、オランダの医学及び衛生行政を視察した。ドイツでは留学中の池田謙齋、桂太郎、松本啓太郎、長井長義らと日本の取るべき医政を練る。明治6年帰国。翌年、初代文部省医務局長・相良良知（長崎で共に、ボードウィンに学んだ間柄）の後任として、医務局長に就任。東京医学校の校長も兼務しながら、『医政76カ条』を定めるため中心的役割を果たす。この年、東京司薬場（国立医薬食品衛生研究所の前身）を創設する。

明治8年、医務局が内務省に移管されると、「衛生局」と改称、初代局長に就任。以降19年間その職に在った。コレラなど伝染病の流行に対して衛生工事を推進し、また衛生思想の普及に努めた。『衛生』の訳語は長与が採用したもので、Hygieneが語源。

医師・薬舗の医学試験制度の発足。防疫・検疫制度導入。牛痘種継所の創設など医事衛生事業の基礎の確立に尽力した。

しかし、明治16年（1883）に内務卿となった山縣有朋と肌が合わず、軍医本部次長の石黒忠憲が衛生局次長に迎えられ、衛生局内では長与局長に劣らぬ勢力を保った。

石黒の紹介で愛知医学校長兼愛知病院長であった後藤新平を見出して明治16年、衛生局に採用し、明治25年（1892）、衛生行政の後継者として後藤を衛生局長に据えた

明治24年に衛生局長を退き、元老院議員、貴族院議員、宮中顧問官、中央衛生会長など歴任。石黒忠憲、三宅秀、佐野常民らと大日本私立衛生会を興し会頭に就任するなど、医学界及び衛生行政の基礎作りに貢献した。長与善郎（作家）は五男。

回顧録『松香私志』（1902）

（2015・6・28 『長崎薬学史の研究—長与専齋』（長崎大医学部）ほか）

38 中島永元（なかじま ながもと）1844 - 1922 長崎 28歳 文部省七等出仕



（フルベッキ集合写真・致遠館）

（長崎の佐賀藩士・後左端・中島、前列左2副島、左4大隈）

明治前期の教育行政に携わる教育官僚

天保15年、佐賀藩士中島永遠の子として佐賀鬼丸小路に生れる。名：秀五郎。藩校・弘道館と蘭学寮に学んだのち、慶応元年（1865）副島種臣、大隈重信らと長崎に游学し、幕府直轄洋学校済美館で蘭学を研究する傍ら、宣教師グイド・フルベッキから英語を学ぶ。

慶応3年（1867）佐賀藩が長崎に新設した蕃学稽古所（致遠館）の教官に抜擢されたが、戊辰戦争が起きると職を捨てて江戸に向かい、国事に奔走した。

明治2年、大学校が置かれると、大学中助教兼中寮長を命じられ、のち大寮長も兼務した。翌年、大学出仕し、大学権少丞となり、大阪洋学校（大阪開成所）の事務取扱となる。明治4年に文部省が新設されると、文部権少丞に任ぜられて帰京。文部省七等出仕として、南校の事務を担当した。岩倉使節団には文部大丞・田中不二麿の随行として参加、米国や英国、欧州の教育行政を調査して、明治6年3月帰国した。

帰国後は、文部省五等出仕となり、その後文部権大丞、文部権大書記官を経て、明治14年には文部大書記官に就任して、明治18年まで本省勤務した。この間、明治6年の労務課長、報告課長、報告局長へと進み、明治13年から、内記所長、内記局長、会計局長を歴任し、明治18年の報告局長再任と、一貫して明治前期の中央教育行政に携わった。

明治18年、大阪に新設された大学分校の校長に転じる。翌年、大学分校が改組して第三高等中学校校長となる。明治20年には、文部書記官として、再び本省に戻り、文部省参事官を経て、明治21年（1888）に元老院議官となり、明治23年、元老院廃止まで勤めて、銀鷄間祇候となる。明治24年（1891）から大正11年（1922）の逝去するまで貴族院議員を務めた。従三位勲二等。

関係資料の写真史料600点、辞令・書簡・手帳・日誌などの文書史料500点が長崎歴史文化博物館に買い上げられている。掲載の写真もその一部である。

女子師範学校設立御用掛も務め、生涯を教育制度と文部行政確立にささげた人物。

（2015・6・30、古写真データ・ベース 他）

39 近藤昌綱（鎮三）（こんどう まさつな）1849 - 1894 幕臣 23歳

文部省中助教 田中不二麿理事官随行



明治の文部・司法官僚 検察官 ドイツ学者

嘉永2年（1849）旗本・近藤庫三郎の長男として江戸本郷に生れる。別名：鎮三。幕府の直轄洋学校開成所でドイツ語を学び、慶応元年（1865）頃に開成所教授手伝並出役となる。幕府崩壊で開成所が閉鎖され、明治2年に新政府の大学校（のち大学）に改組すると大学校忠得業生に任命される。以降、大学大得業生、大学少助教となり、大学が廃されて文部省が置かれた明治4年に文部権大助教、そして文部中助教へと進む。同年、岩倉使節団欧米派遣に際し、文部大丞・田中不二麿文部理事官の随行を命ぜられる。文部随行は、長与専斎（医学）、中島永元、内村良蔵（英語）、今村和郎（仏語）、そして、近藤（独語）の五人であった。文部随行員は米国経由で、田中理事官に先立ち、一足先にそれぞれの目的地に向かう。近藤はプロシアをめざし、ドイツの学事調査に当る。明治6年には、ベルリン公使館在勤の外務省二等書記官として残留するが、病を得て明治7年に帰国した。

帰国後、文部省八等出仕となり、翌年文部省報告課雇となる。明治13年には、准奏任文部省御用掛となって報告局に勤務する。この間、ドイツ語教育文献などの翻訳に従事している。『母親の心得』（1875—H. クレンケ著）もその一つ。文部省刊の『文部省雑誌』（のち『文部省教育雑誌』）には、近藤の翻訳記事が多数掲載されている。

明治17年（1884）、司法省書記官に就任し、第一局（のちの記録局）に勤務する。文部省御用掛も兼務し、引き続き文部省報告局にも勤務した。明治19年（1886）2月、在官のまま、自費でドイツ留学を許されるとともに、司法部内行政及裁判事務調査を命じられ、東京始審裁判所検事に転じた上で、翌3月横浜を出帆し、ベルリン大学、ハイデルベルク大学、ライプツイヒ大学に学び、明治23年（1890）7月に帰国した。

その後、同年8月大審院勤務となり、明治25年（1892）には、長野地方裁判所検事正となったが、病により翌年3月に退官。明治27年、46歳で死去した。

参考文献に、『近藤鎮三「米欧回覧私記」』（加納正巳）、『近藤鎮三略伝：初期独逸学者の歩んだ道』（上村直己）『近藤鎮三』（国民過去帳—明治編 大植四郎編）、『近藤昌綱』（富田仁）など。

（2015・7・1 題記文献参考）

40 今村和郎 (いまむら わろう) 1846—1891 土佐 26 理事官随行文部省中教授



日本民法の父 日本人最初の国際会議で発表

土佐藩高岡村の豪商の長男として 1846 年に生まれる。1619 年生まれの今村伊兵衛が、一領具足の農民から、「紙屋」を始めたが今村家の始祖という。慶応 2 年 (1866) 土佐藩開成館に入門。1869 年箕作貞一郎 (麟祥) の私塾共学社にてフランス語を習得。その後官吏に抜擢され民部省に入る。文部省に出向し 1871 年中助教の時、岩倉使節団に随行して、文部大丞・田中不二麿理事官随員として、長与専斎 (乗継—医学教育)、中島永元 (英語)、近藤昌綱 (鎮三—ドイツ語)、内村良蔵 (英語) と今村和郎 (仏語) の文部五人組が学生取調で派遣される。アメリカで手間取る正使使節団に先駆けて、1872 年 2 月パリに入り、ジュネーブ、ベルリン、ロシア (サンクトペテルブルグ) を回覧する。パリでは司法省派遣の理事官佐々木高行を全面的に補佐したことより、後に司法専門家に転じる。今村はフランスに残って、1873 年のパリで開催された第一回国際東洋学会に、鮫島、田中不二麿、入江文郎らと共に参加し、「長谷寺の碑文」「日本政府の収入」「漢字の日本渡来」「日本農業に用いる肥料」の四つの発表を行っている。尚この会議は、日本通のレオン・ド・レニーが全体会議の議長を務め、鮫島が日本学会の議長をしている。今村はそのまま、左院御用掛として、三年間年 1000 円の俸給を得て、仏留学を続け、パリ東洋学校の日本語教師として勤める傍ら、法律の勉強を続けたようで、1879 年帰国後、太政官法制局権少書記官兼司法権少書記官、内務省少書記官、内務権大書記官、参事院員外議官補佐、外務省権大書記官、行政裁判所評定官などを歴任している。

明治 15 年 (1882) には板垣退助、後藤象二郎らの渡仏に随行して通訳を務めて、今村はそのまま明治 17 年までフランスに滞在した。帰国後はフランス法学者ボアソナードと共に、日本の民法制定に尽くし、殆ど全ての法律取調委員会に出席し、欧州事の解説に当たっている。著作に『民法正義人事編卷之式法令正義』『民法正義財産編』『解難』『民法合本』(何れも明治 23 年前後) があり、明治 24 年 (1891) には、貴族勅撰議員となり、法務局部長を拝命したが、体調を崩して、辞職し、その年 5 月に死去。享年 44 歳。正四位五等を叙勲されている。葬儀では、明治 14 年創立の明治大学の法学教授として、生徒代表から弔辞を受けている。

(2014・11・23)

4 1 大島高任(おおしま たかとう)1826 - 1901 岩手 46 歳 工部随員(鉱山助)



幕末明治期の鉱山技術者 日本近代製鉄の父

文政 9 年 (1826)、南部藩の侍医・大島周意 (かねおき) の子として、陸奥盛岡に生れる。幼名：文治、周禎、総左衛門。明治 2 年より、高任。

天保 13 年 (1842) 17 歳で、江戸に留学。蘭方医の箕作阮甫や坪井信道に師事し、更に長崎に留学。西洋医学を学ぶ予定が、そこでオランダ人・ヒュゲイニンの『大砲鑄造法』の原書に出会い、手塚律蔵 (1787 - 1866、蘭学者:高島秋帆に学ぶ。西周、神田孝平、津田仙の師) と共訳し、鑄鉄に目的替える。長崎で高島浅五郎 (1821 - 1864:高島秋帆の子) に西洋流の兵法、砲術、採鉱、製錬の技術を精力的に学んで帰藩し、若い藩士たちに、軍事指導などしてその成果を広めた。

嘉永 6 年 (1853)、ペリー艦隊来航で軍備の充実を迫られ、幕府も大船や大砲製造を許可・奨励する時代に入ると、高任は水戸藩主・徳川斉昭から招かれて、薩摩藩士らと共に那珂湊に大砲鑄造用の鉄を溶かす反射炉二基の建設・鑄造に成功する。しかし、原材料が砂鉄のため、その性能は十分でなかった。更に研鑽して西洋と並ぶ高品質な鉄を作るべく、良質の磁鉄石が産出する大橋 (釜石) の地に、『大砲鑄造法』を参考にして西洋式高炉を建造し、試行錯誤の末、安政 4 年 12 月 1 日、遂に鉄鉱石製錬による本格的連続出鉄に日本で初めて成功した。12 月 1 日は現在「鉄の記念日」となっている。

その後、引き続き橋野、左比内、栗林、砂子渡等各地に 10 基の高炉を築いた。文久 3 年 (1863) 盛岡藩に戻った高任は、八角高遠らと共に英語、蘭学、医学、物理、化学、兵術、砲術、物産などを教える本格的洋学校：日新堂を創設する。

明治に入り、新政府に出仕、鉱山助となって、明治 4 年の岩倉使節団の肥田理事官随員として参加し、欧米の鉱山や製鉄の実態を視察した。

帰国後の明治 7 年、釜石官営製鉄所の創設に絡み、大型高炉を主張するドイツ人技師・ビャンヒーと小型高炉説の高任と意見が対立し、政府が大型を採用したので高任は釜石を去る。この官営製鉄所は操業三年で頓挫。以降、民営の再建を待つことになる。

その後の大島高任は、北海道で日本人初の鉱山の火薬による採鉱法に着手、新技術で十輪田、小坂、阿仁、佐渡鉱山局長として鉱山発展に尽くし、金、銀、銅などの製錬に画期的成果を収めた。また、我が国初めての抗師学校や工学寮 (現東大工学部) の設置を進言し創設に関与。その他、西洋種苗によるワインの国産醸造販売の先駆を成すなど活躍は多岐に渡った。明治 23 年日本鉱業会初代会長。長男・道太郎が八幡製鉄所技官として、同製鉄所一号高炉点火翌月死去した。

(2015・7・1、新日鉄住金HP、盛岡市HP、コトバンク)

42 瓜生震（うりゅうしん） 1853-1920 越前（福井）19 工部省・鉄道中属

（写真未発見、編集中）

通弁出身から役人を経て実業家（三菱の支配人）へ

長崎で蘭学を学び、後に坂本龍馬の海兵隊に属す。明治4年工務省鉄道寮に属し、同年岩倉使節団に通弁・鉄道中属として随行参加する。サンフランシスコで、大島高任とニューアルマタン鉱山を共に視察して以来、造船頭・肥田為良（浜五郎）と随行して欧米を視察する内に、交通・鉄道の知識を深める。使節団に先駆けて、イギリスに毛利元敏らと先発している。

帰国後、後藤象二郎の鉱山事業に関わり、後に三菱の高島鉱山長崎支配人として、グラバーとともに石炭の輸出に携わる。1907年には、近藤廉平、岩崎久弥とジャパン・ブリュワリーを買収して、麒麟麦酒を創設。

東京海上保険の役員、興銀の監査役（若尾民造、相馬永胤と同時に）、九州鉄道（今の、鹿児島本線、長崎本線）の発起人総代で創設に参画している。明治20年の女子教育奨励会発起人（伊藤博文委員長）に179名中、23番目にランクされている。（一口250円＝現在価格数百万円相当、因みに岩崎久弥20口、渋沢栄一12口など）

「口八丁手八丁」 「計画の才豊か」 「平板謹直、実務的好漢」などの評がある。瓜生演（はじめ）（1842-1913）＝官僚（幕府英語学校教師、大阪理学校校長、初代神戸税関長、鉄道助）瓜生商会（下関、船積み代理店）創設者は震の兄である。

三井財閥における団琢磨に比較する人もいる。折花攀柳の風流人でもあったようで、十八番は追分節だったという。（2014・11・17）

43 岡内重俊（おかうち しげとし）1842—1915 高知 30 理事官随権少判事



海援隊秘書役から、生涯の勅撰貴族議員へ

天保13年 土佐高知藩士 岡内清胤の長男として生まれる。通称：俊太郎。慶応3年、佐々木三四郎に仕えて長崎の土佐商会に勤務。そこで坂本龍馬と知り合い、海援隊に入り秘書役を務める。イカロス号事件の解決やライフル銃1300挺購入に尽力し、土佐藩に銃を受け渡す。その間に土佐尊皇派の渡辺弥休馬、本山只一郎などと坂本龍馬の会談を斡旋する。明治2年司法官に入り、明治6年、岩倉使節団後発理事官・佐々木高行司法大輔の随権少判事として、欧州を巡遊する。帰国後、司法大検事、大審院刑事局詰、高等法院陪席判事、長崎上等裁判所心得を歴任。明治19年元老院議員，明治23年から亡くなる大正4年まで勅撰貴族院議員をつとめ、明治33年には男爵となる。晩年は政友会所属。日露戦争の功績で旭日重光章を受けている。大正4年74歳で死去。長男：岡内重清（1884—1907）は男爵、正三位。娘の壽（ひさ）は松本君平（1870—1948）—政治家、教育者、思想家、文学博士、衆議院議員の妻。

（2014・11・28）



岩倉使節団30周年記念写真（前列左端が岡内重俊）

4 4 中野健明（なかの たけあき）1844 - 1898 佐賀 28 歳 司法省権中判事

佐々木高行随員



（致遠館:佐賀藩士）

（前左から副島要作、副島種臣、小出仙之助、大隈重信）

（後ろ左:中島永元、相良知安、堤薫信、中野健明、中山信彬）

明治の外交官・大蔵官僚 長崎・神奈川県知事

佐賀藩士・中野中太夫の次男として生まれる。幼名：剛太郎。

写真にあるように、長崎に出て同藩の英語塾・致遠館で、副島種臣、大隈重信、中島永元、相良知安らとフルベッキに学ぶ。

明治新政府に出仕、大学校中助教兼中寮長、大寮長を経て、外務少丞に。明治3年、キリシタンが日本各地で迫害されていると欧米各国公使の苦情を受けて、司法小判事、外務権大丞として、楠本正隆と共に実態調査を命ぜられ、中野は、徳島、松山、高松、高知、鹿児島を分担して各地を巡見して報告を出している。明治4年、外務省条約改正掛を命じられ、条約改正草案を作成している。同年、司法権中判事として、岩倉使節団の佐々木高行理事官随行を命ぜられ、欧米を視察した。帰国後の明治6年、外務省一等書記官に任じられて、フランス公使館勤務となる。明治10年、フランス公使館勤務のまま、パリ万国博覧会理事官を兼務する。明治11年7月帰朝。明治12年、外務権大書記官に任じられる。明治13年、外務一等書記官としてオランダ公使館勤務となる。翌年、外務書記官。明治15年オランダから帰朝、大蔵大書記官となり、関税局長を務める。明治17年大蔵一等主税官を拜命。翌年、大蔵省関税局長兼主税局長の重責を担う。明治21年には兼官を免ぜられる。明治23年、長崎県知事に転出する。長崎にコレラが猖獗した時期で、これを無難に乗り切った。この頃、ロシア皇太子ニコライが長崎に上陸し、鄭重に対応したと評判になる。又、逡信次官の内命があったが、地方長官を頻繁に替えるのはよくないとこれを固辞したともいう。その後、神奈川県知事も歴任している。その時の大隈重信外務大臣に宛てた自筆文書『清国人陳璞動静探索報告書』（明治29年）が残されている。陳は、清朝の転覆を企てた人物で、密かに神戸、東京に潜入し陸海軍と交際・接触していた模様で、神奈川に潜伏した動静を探索した報告書である。現職のまま死去。甥に洋画家の岡田三郎助がいる。洋画家の愛好家でもあった。「温然として、一奇なく、順良なる婦人の如く、人との対応に如才なく、弁舌又爽快」の人物評を遺す。（2015・7・2、地方長官人物評、他）

45 平賀義質（ひらが よしただ）1826—1882 福岡 45 大蔵理事官随行
権少判事

（写真未発見、編集中）

黒田藩最初の米国留学生 使節団に西洋食事行儀指南、悲劇の最後

文政9年福岡藩士：平賀源六の子として生まれる。通称：磯三郎。
長崎海軍伝習所に学ぶ。

安政5年（1858）藩命を受けて、生徒数人を連れて長崎で西洋学を研究。

慶応3年（1867）の春、今度は藩命でアメリカ・ボストンに木間栄一郎、井上良一等と留学して、1870年の冬に帰国する。団琢磨、栗木慎一郎らに英語を教える。新政府に出仕して、司法省判事となる。1871年11月に佐々木高行・司法大輔理事官随員として、岩倉使節団に加わり渡米、使節団の粗暴な食事光景にあきれて、岩倉使節に建言し、西洋食事作法を書いて、《スープは音を立てて飲むべからず》《ボーイには、低い声で命じるべし》など行儀を教えると、逆に反発して真逆を行う団員がいたようだ。

使節団から帰国後は、函館裁判所長、検事局判事等歴任する。

訳書に「日本立法資料全集」「英法小言」（共に George Long 編）と

「米国カリフォルニア州刑典」などがある。

1882年、長男が服毒自殺の報に接し、駆けつけた際、誤って息子が飲んだ毒水を口にして、その場で絶命する悲劇的な死に方をする。

跡取りなくなり、親戚の石松決（おさむ）を長女の婿に迎え、平賀義美として、跡を継ぐ。平賀義美は、化学者、実業家として、関西商工会の父よばれている。

（2014・11・29）



幕末に蘭兵学を学んだ陸軍少将 華麗なる子孫

文政 13 年 (1830)、備中・鴨方藩典医・原田碩斎の長男として生まれる。駒之助、のち敬策・吾一と称す。備中松山藩家老の山田方谷に学ぶ。後に江戸に出て、蘭学者・伊東玄朴に師事。砲術等洋式兵学を修めて幕府に出仕。安政 3 年、蕃書調書取調出役教授手伝・海陸軍兵書取調出役に就き、兵学を講じるなど翻訳にも従事する。文久 3 年 (1863) 横浜鎖港談判使節外国奉行・池田長発らの遣使使節団一行に随行して渡欧。兵書の購入に努め、使節団帰国後も滞欧して、オランダ陸軍士官学校に学ぶ。慶応 3 年帰朝。戊辰戦争の際、一時鴨方藩に戻り出仕したが、再び、江戸に出て、陸軍所教授・開成所教授として洋学を教授した。西周、津田真道、神田幸平、福沢諭吉らと研究に励む。慶応 4 年、砲兵頭となり、維新後は沼津兵学校教師を経て、新政府の徴士として出仕。軍務官権判事、陸軍大佐、兵学校御用掛、兵学校大教授、兵学校頭、太政官大書記官、一等法制官を歴任し、陸軍少将・山田顕義理事官の随行員として岩倉使節団に参加し、フランス、オランダなど欧米各国を巡遊して帰国。明治 12 年には陸軍局砲兵局長に、同 14 年には陸軍少将へ進み、東京砲兵工廠長・砲兵工廠提理・砲兵会議議長など陸軍の要職を歴任している。桂太郎、寺内正毅、黒木為楨、長谷川好道、川村景明、乃木希典ら、明治の将星は、兵学校大教授時代の教え子である。予備役編入後の明治 19 年 (1886) に元老院議官、同 23 年には貴族院議員に勅選され、同 33 年には、兵器・軍律刑法研究の功により、男爵となる。明治 39 年には、勲一等瑞宝章、没後に勲一等旭日大綬章を追贈された。

長男原田豊吉は地質学者で東大教授、その妻・照子是一道がドイツ留学で知り合ったドイツ人武器商人マイケル・ベアの娘。次男の原田直次郎は洋画家。孫の原田熊雄は、元老西園寺公望の秘書官・男爵で、「原田文書」で著名である。熊雄の妹信子は有島生馬の妻。一道は駿河台に 3000 坪の邸宅を持ち、六棟の日本家屋、洋館を建て、西園寺公望邸をしのぐと言われている。ケーブルはその邸の一角に下宿していた。西園寺公望欧州留学の指南役でもあった。

(2 0 1 4 ・ 1 1 ・ 2 3)

47 吉原重俊（よしはら しげとし）1845 - 1887 鹿児島 27歳 外務三等書記官



日本人初イエール大入学 初代日銀総裁

弘化2年（1845）鹿児島で薩摩藩士の子として生まれる。幼名：弥次郎。海外留学中は、大原令之助の変名。明治6年より、吉原重俊と改名。

幼くして藩校・造士館に学び、漢文・詩文に長じ、12歳で藩主句読師助に任じられる。文久2年（1862）薩摩藩士の父・島津久光上洛に随行・大阪藩邸に入るが、京都伏見の寺田屋事件に絡み謹慎処分で鹿児島に送還される。文久3年、薩英戦争が起きると謹慎を解かれ、大山巖、西郷従道らとともに英艦隊に切り込もうとして果たせず。

その後、藩命で江戸に出てから、函館で武田斐三郎から洋学を、横浜でオランダ改革派教会宣教師のS.R.ブラウンに英語を学ぶ。慶応2年（1866）、薩摩藩第二次米国留学生5名（仁礼景範、江夏嘉蔵、湯地定基、種子島敬輔、大原令之助）の一行として英国経由渡米。ニューヨークでは、ブラウンの母校モンソン・アカデミーに木藤市助（後発留学生）らと共に入学し、英語や古典を学び、イエール大学入学の勉強に努める一方、ボストン郊外に留学していた新島襄との交流を深めた。明治2年（1869）ブラウン牧師の元で洗礼を受けクリスチャンとなる。同年、官費留学生に認められ、ニューヘブンのイエール大学に入学して政治・法律学を学ぶ。就学の途次の明治3年、大山巖ら普仏戦争観戦武官団一行に随行を命ぜられ、品川弥二郎、中浜万次郎と共にイギリス経由で、明治4年、ベルリン、フランクフルトを経由して休戦中のパリに入る。そこで、明治政府がフランクフルトのナウマン社に依頼していた明治紙幣の印刷監督を命ぜられ、大山の一行と離れて、その任に就く。明治5年、米国の岩倉使節団からワシントンに呼び戻され外務取調通訳兼外務三等書記官に任じられる。全権委任状を取りに大久保利通、伊藤博文に随行して帰国し、共に再渡米するが交渉は打ち切りと決まり、次のイギリスで外政事務取調を拝命、従事する。

明治6年、帰国後、外務省五等出仕で入省、外務一等書記官として一旦米国公使館勤務を命ぜられるも、一転大蔵省五等出仕に転じられた。明治7年、租税助、横浜税関長となるが、大久保利通の清国出張に高崎正風、ボアソナードらと随行する。

明治10年、大蔵省租税局長兼関税局長。西南戦争の被害調査、難民救護に当る。明治11年、パリへ出張して、松方正義、上野景範、青木周蔵らと不平等条約改定交渉。明治13年、横浜正金銀行管理長、大蔵少輔。明治15年、日本銀行創設で、初代総裁となり、欧米で外債募集。兌換紙幣回収整理。手形、小切手の流通促進など近代的金融制度の整備に当たったが、惜しくも現職のまま病死した。

（2015・7・3 『日本銀行初代総裁：吉原重俊』）



アマースト大学で日本人初の学士 同志社英学校創設

天保14年(1843)、江戸の安中藩江戸屋敷で、藩士・新島民治の長男として生まれる。本名：新島七五三太(しめた)。のち、敬幹。維新後帰国して「襄」「讓」を名乗る。元服後、アメリカの地理書に触れアメリカの制度に憧れる。幕府軍艦操練所で洋学を学ぶ。やがて漢訳聖書に出会い、福音の国をめざし密航を決意し、元治元年(1864)藩の「快風丸」で函館に渡り、そこでロシア司祭・ニコライ・カサートキンの協力で、米船ベルリン号で函館から上海向け密航に成功する。上海でワイルド・ローヴァー号へ乗り換え、慶応元年(1865)ボストンに着く。ボストンで、同船船主・A.ハーディー夫妻の援助で、フィリップス・アカデミーに入学する。翌年洗礼を受け、慶応3年、同アカデミーを卒業して、アマースト大学に入学して理学士の学位を得て明治3年卒業。後の札幌農学校教頭ウィリアム・スミス・クラークに化学を教わる。明治4年の森有礼推奨で密航者から留学生の身分となる。明治5年、岩倉使節団と会い、最初、木戸孝允の私設通訳で使節団に参加するが、三等書記官(並)として正式に田中不二麿理事官随員として、欧州に渡り教育制度調査を二人で精力的に行い、文部『理事功程』報告書の草案執筆に関わる。使節団と離れて、ドイツのヴィーズバーデンでリュウマチ湯治のあと米国に戻り、明治7年、アンドーヴァー神学校を卒業し、アメリカン・ボードの日本伝道通信員(宣教師)として明治8年帰国する。京都で公家：赤松保実の別邸を借り受けて、京都府知事・楨村正直、府顧問・山本覚馬の賛同を得て、同志社英学校を開設し初代社長に就任する。教師二人、生徒8人のスタートだった。

明治9年、山本覚馬の妹・八重と結婚する。同年、熊本バンドの数名が入学する。金森通倫、横井時雄、小崎弘道、吉田作弥、海老名弾正、徳富蘇峰、不破惟次郎の面々。

明治10年には、同志社女学校を設立。明治13年、大学設立の準備を始める。

明治17年、再渡欧して、ドイツのヨハネス・ヘッセの家で幼少の息子・ヘルマン・ヘッセと会っているが、スイスで心臓発作を起こし、一旦遺書まで書くが、翌年暮帰国。

明治19年、京都看病婦学校(同志社病院)設立。明治21年、徳富蘇峰呼びかけで、井上馨、大隈重信、土倉庄三郎、大倉喜八郎、岩崎弥之助、澁澤栄一、原六郎、益田孝らの大学設立寄付の約束を取り付ける。然し設立運動中に心臓を悪化させて、回復せず、明治23年死去した。最後の言葉は「狼狽する勿れ、グッドバイ、また会わん」。

同志社大学の創設は明治45年になったが、新島の理想は、近代国家にはリーダーとしての人材養成が必須であり、その為に、キリスト教人格主義、全人教育の導入で、「智徳並行の薫陶」を希求していた。(2015・7・5、他)

49 手島精一（てじま せいいち）1849 - 1918 沼津 留学生 大蔵省理事官随員



工業教育、博覧会、博物館など社会教育事業の先駆者

嘉永2年（1849）沼津（元菊間）藩士・田辺四友の次男として江戸藩邸で生まれる。兄・田辺貞吉（初代住友支配人）。12歳で同藩士・手島右源太（惟敏）の養子となる。藩校・明親館で洋学を学び、明治3年、華頂宮の留学に、柳本直次郎と共に同行渡米し、グリフィスの実家に寄宿し、ラファエット・カレッジで物理学、建築学を一年学んだところで、岩倉使節団の通訳を務めて、肥田理事官のフィラデルフィア視察に同行、そのまま大蔵省十三等出仕を命ぜられ、欧州へ随員する。明治7年帰国。翌年、東京開成学校（東大前身）の監事に就任する。明治9年、製作学教場事務取締の兼務となり、フィラデルフィア博覧会を視察、翌年、教育博覧館（のち科学博物館）館長補。東京図書館（のち帝国図書館）主幹を兼務する。明治11年パリ万国博覧会を視察し、工業教育の重要性を認識し、九鬼隆一、浜尾新、山田不二麿らと共に、明治14年東京職工学校（現東京工業大学）を設立。同時に東京教育博物館長に就任する。それも、手島の創案で、世界に先駆けたユニークな民衆の科学・工学への啓蒙教育の場となった。（『手島精一の教育博物館経営』一佐藤優香）明治17年、ロンドン衛生博覧会に従事。その後も、内外の博物館、博覧会で主役的役割を演じる。

明治19年に『実業教育論』を発表、井上毅の文部大臣時代（明治26年—27年）の実業教育法制に理論的根拠を与えた。然し、森有礼文部大臣とは、森の「学校教育重視」に対し、手島の「社会教育」重視で、鋭く対立する時期もあった。

明治23年（1890）、東京職工学校が東京工業学校（のちに東京高等工業学校、東京工業大学）と改称を機に、校長となり、大正5年（1916）まで勤めて、現場技術者の養成・輩出に多大な貢献をする。工業教育の慈父と呼ばれる所以である。

共立女子職業学校の校長も兼務し30年余、女子の職業教育や盲啞教育にも尽くした。明治30年文部省普通学務局長。明治31年文部省実業学務局長も務めた。

大正5年の退職後は、東京高等工業学校の名誉教授となり、同時に、政界、財界、教育界の諸名士が発起人となって、『財団法人・手島精一工業教育資金団』が設立され、以降90年余、学生への奨学金、若手研究者への研究助成の事業が継続されている。

著書『青年自助論』（好きこそ物の上手なり。海外に発展する其の志や壮なり。など）『近代日本青年期教育叢書』がある。正四位勲二等。

（2015・7・6、ながみみ・ブログ、『青年自助論』など）

50 河野敏鎌（こうの とがま）1844 - 1895 高知 28歳 司法少丞（後発組）



儒教的君臣国家を生涯貫いた、明治初期の政治家

天保 15 年（1844）土佐藩郷士の河野通好の長男として高知に生れる。幼名：万寿弥。安政 5 年（1858）江戸に遊学して安井息軒の三計塾に学ぶ。同弟子に陸奥宗光、谷千城、佐々木高行。文久元年（1861）帰国して、土佐勤皇党に加入、武市半平太や坂本龍馬らと交遊関係を持つ。文久 2 年、五十人組に参加し京都と江戸の間を往来して国事に奔走する。一藩勤王主義は土佐に始まり全国に尊皇攘夷運動として波及するが、藩主・山内容堂が佐幕派に鞍替えして藩論が転換し、河野らは投獄・拷問に耐えて 6 年で、明治維新を迎える。出獄して後藤象二郎の手引きで大阪に上り、江藤新平の知遇を得る。

明治 2 年、七等・侍詔局出仕、広島県初代参事となる。明治 5 年、司法少丞で岩倉使節団後発隊として、江藤司法卿理事官随行を命ぜられ渡欧する。（実際には江藤司法卿は派遣中止となり、河野が鶴田皓、岸良兼養、井上毅、益田克徳、沼間守一、名村泰蔵、川路利良を率いることになる）

帰国後、司法大丞となる。明治 7 年（1874）の佐賀の乱では、内務卿・大久保利通の起用で権大判事として鎮定の為、九州に向かい熊本鎮台司令長官の谷千城と共に討伐し、捕縛された旧知の江藤新平を釈明の機会も与えず斬首の判決を宣言したことで後世の歴史家に種々の憶測を生む。明治 8 年、元老院議官へ、明治 10 年の西南戦争後も、臨時裁判所裁判長として、戦犯審理にあたる。明治 11 年、元老院副議長となる。

明治 13 年、文部卿となるや、田中不二麿の「教育令」を大幅に変えた「改正教育令」を發布し、自由主義から国家が人民を教育する方針に転じ、これがその後の文部行政として定着する。明治 14 年、初代農商務卿となるが、明治 14 年の政変で大隈重信らと下野する。翌年、大隈重信を中心に、小野梓、尾崎行雄、沼間守一らと立憲改進黨を結党し副総理となるも、明治 17 年解党を主張し自ら離脱。立憲改進黨は、自由党と共に自由民権運動を推進し、イギリス流議院政治と漸進的改革を主張していた。

明治 21 年、枢密院顧問として憲法の審議にあたる。それ以降、第一次松方内閣の内務大臣を皮切りに、司法大臣、農商務大臣、第二次伊藤内閣の文部大臣などを歴任し、明治政権の重職を担うことになる。河野敏鎌の師・安井息軒は昌平黌の松崎謙堂に師事した朱子学派で、天皇を中心にした儒教的国家を理想とし、上下の身分、徳治の王道政治、五常（仁、義、礼、智、信）を重んじた。河野は、その為に民意は国家安寧の為に抑えても仕方ないと立場から、政権の中枢に立ち続けたと考えられる。恩人江藤新平への厳罰も、明治国家の安定を最優先したと考えるべきか。明治 26 年子爵を授爵。勲一等瑞宝章。（2015・7・7、コトバンク、他）

5 1 鶴田皓（つるた あきら）1835 - 1888 佐賀 37 歳 明法助 司法省随員



日本近代法典の編纂者 政治家より官僚に徹した文人・碩学

天保6年（1836）佐賀藩多久邑・多久家家臣鶴田斌（ひとし一馬乗格20石）の子として生まれる。字：玄縞。通称：弥太郎。号：斗南。

8歳で伯父・草場船山（草場佩川一弘道館・昌平黌教授の長男、弟子に藤山雷太、原三溪、友人に、頼三樹三郎、揖取素彦、岩崎弥太郎、清河八郎、梁川星巖）に四書五経、大学、小学、詩賦、文章を学ぶ。寛永6年（1853）福山藩藩儒・江木鰐水の久敬塾で学ぶ。鰐水は藩主・老中阿部正弘の師である。安政元年、江戸に出て昌平黌で安積良斎（門人に岩崎弥太郎、小栗忠順、栗本鋤雲、清河八郎、谷千城等）や羽倉簡堂（律令）、藤森弘庵などに学ぶ。帰郷して、邑校：東原庠舎の教諭となるが、万延2年（1861）肥後の木下犀潭と岡松甕谷（論語、経学、律、英語・蘭語）に中国法（唐・民・清の三律）を学ぶ。木下の門人には、井上毅、横井小楠、元田永孚、竹添進一郎、河井継之助らがいる。因みに、井上毅は鶴田が司法省に紹介した。戊辰戦争では、佐賀藩のアームストロング砲隊分隊長として、会津戦争を戦う。明治2年、大学校に入り、大学少助教となる。邑主の推薦で、明治3年司法省刑部大録となり『新律綱領』を水本成美（熊本）と助役・鶴田皓、長野文炳、村田保で編纂した。明治5年明法助となり『改訂律令』を編纂。岩倉使節団司法省後発組として渡欧。ギュスターヴ・エミール・ボアソナードの講義を受けて、帰国する。帰国後は、明法権頭、司法大丞一等法制官、太政官大書記官、一等法制官、検事兼元老院議官と昇進する。東洋大日本国国憲按の起草に参加する一方で、明治14年からは大審院検察長、陸軍刑法審査員、海軍軍律刑法審議員となって、陸軍刑法、海軍刑法、旧商法など憲法を除く、五法（刑法、刑事訴訟法、民法、民事訴訟法、商法）の法典編纂の逐条審査を行い、明治政府の法制官僚として、幅広く立法、法務行政に一貫して携わった。その態度は、決して西洋一辺倒ではなく、また伝統的思想にかたくなに拘るものでもなく、指導者ボアソナードも一目置く存在であった。明治15年参事院議官、明治18年から元老院議官に復帰する。正三位勲二等旭日重光章が彼の栄典だが、政治には関与せず、司法官僚として、日本最初の近代法典である旧刑法編集委員長を務め、第二代検事総長も歴任した。鶴田は、荻生徂徠の経世済民、民政第一、国政の基は実学に在りと考え、国家が無ければ天皇もないと国民を重視した。酒を好み、一弦琴を弾き、唄い、詩作を楽しみ、探梅、観月、相撲見物や温泉に親しむ風流人であり、明治19年の「学者鑑」では仏語学者のトップ、西園寺公望より上にランクされている。『鶴鳴帖』（204名、234点の詩文画・揮毫集）有り。

（2015・7・8、『日本近代法典の編纂者—鶴田皓』（鶴田徹）ほか）

52 岸良兼養（きしら かねやす）1837 - 1883 鹿児島 35歳 権中判事（随員）



大検事（今の検事総長）、第二代目大審院長

鹿児島藩士・岸良兼善の長男として天保8年（1837）に鹿児島で生まれる。

家系は13世紀にさかのぼる。大伴氏後裔伴姓肝付氏の分家・岸良家で、大隅国肝属郡肝付郷岸良邑を支配する豪族であったが、戦国時代に島津家に降伏し軍門に下る。

岸良俊之丞（兼養）、は島津久光の小姓などを務める一方、1865年ごろ、長崎の何礼之の英語塾に学ぶ。当時、同英語塾は、全国から200名近い門人を集めていた。薩摩藩が一番多く、同門には、前田弘安（正名）、高橋四郎左衛門（信吉）、山口範三（尚芳）鮫島武之助（尚信）、錦戸広樹（陸奥宗光）、萩原三圭なども学んでいた。

明治新政府に、議政官史官として慶応4年から明治2年間を務め、そのご、監察司知事、刑部少丞、司法少丞などに就いた。

明治5年（1872）、司法卿江藤理事官随員として、岩倉使節団後発隊に選ばれて、河野敏謙、鶴田皓、井上毅、益田克徳、沼間守一、名村泰蔵、川路利良らと欧州視察に派遣される。（因みに、江藤は都合で洋行は取りやめている）

帰国後、明治6年権大検事となる。明治7年の佐賀の乱の裁判では、臨時大裁判長・河野敏謙と共に審判に加わる。明治8年、大審院が設置されると、初代大検事（大審院詰検事）に任命された。これは現在の検事総長に相当する（後任の二代目は鶴田皓）。

明治10年の西南戦争での判決にも、裁判所長：河野敏謙、検事長：岸良で関与した。同年、大審院検事長に累進する。更に、明治12年には、大審院長に任じられる。初代院長は玉乃也履（たまの せいりー岩国、1825 - 1886）で、その地位は「開拓使の上で、諸省の次」とされ、勅任判事の中から、司法卿の奏任で決まった。岸良は、玉乃を継ぐ、二代目大審院長であった。

明治14年、司法少輔に転じ、明治16年、元老院議官を兼任となったが、同年現職のままで死去した。弟の岸良俊介も、福岡県令、元老院議官を務めている。

明治元年の大久保利通宛書簡がある。『太守公安着 議政官無人 上京待望ス引留メノヨシ 小松帰国ノ模様 壮之丞滞坂召寄 会計一条評議 御地へ輔相卿御使トシテ差立テ 箱館一条厚配アラン 海江田大病』大久保の連絡係をしていたと思われる。

又、明治10年11月8日の勅語に『九州地方国事犯処刑ニ付 久シク該地ニ在テ電勅事ニ従ウ 朕甚タ之ヲ嘉ミス』（河野敏謙、岸良兼養宛）従四位勲二等。

（2015・7・8、朝日コトバンク、他）

53 井上毅 (いのうえ こわし) 1844 - 1895 熊本 28歳 司法中録 後発組



明治国家形成のグランド・デザイナー 抜群の法制官僚 清廉な人格

熊本藩家老・長岡是容（監物）の家臣・飯田権五兵衛の三男に生まれるが、井上茂三郎の養子になる。家老吉田家家塾・必由堂と藩校・時習館に14歳から居寮生として朱子学を中心に学び、江戸、長崎にも遊学する。1864年、横井小楠・四時庵で、「沼山対話」を試みる。明治3年、貢進生として開成学校でフランス語を学ぶ。明治4年司法省に仕官し、明治5年の司法省理事官随行後発隊8人に加わり、岩倉使節団に欧州で合流して、ベルリン、パリなどで司法制度調査にあたる。ボアソナードの法講義を聞いている。翌年帰国して大久保利通に登用され、台湾出兵後の清国での外交交渉に随行する。大久保暗殺後は岩倉具視のブレーンとして活躍、太政官大書記として、司法省と正院法制局に勤めて、刑法、治罪法の取調にあたる。古事記、日本書記など国典の研究に努めて、シラス（支配者＝天皇が公私を混同せず、国と家とを明確に区別して、支配者が、国民の心を汲み取り、国民の利益を図るべくして行う）という統治理念に到達する。

明治14年、天皇の指示で、参議達の憲法意見を求められた際、イギリス型立憲君主制憲法案と早期国会開設の内容で提示した大隈重信に対し、漸進主義とプロイセン型憲法制度を岩倉具視に提出。同時に、大隈排斥の為に、伊藤博文、井上馨、岩倉具視、松方正義、黒田清隆、西郷従道らに工作して、開拓使官有物払下げ事件は大隈陰謀説を流布して、明治14年の政変を演出する。明治14年の政変が、その後の明治国家の形成の大きな転換点となり、第二の明治維新とも呼ばれることになる。

明治14年11月、三条、岩倉二大臣に、井上は「人心教導意見案」を提出する。その内容は、①官報発行と政府系新聞発行②士族授産対策（士族を民権派に走らせぬため）③中等教育・職業教育の強化④漢学奨励⑤ドイツ学の奨励（法制、軍事・科学）である。

明治15年、軍人勅語の起草に関わる。伊藤博文の憲法調査出張を企画し、伊藤の帰国後は、夏島での伊東巳代治、金子堅太郎やドイツ人顧問H・ロエスレル、A・モッセの協力を得て『大日本帝国憲法』の草案作成に関わり、完成までに伊藤博文と丁々発止のやり取りをしている。明治憲法発布時に出された伊藤博文著『憲法義解』は実質、井上の著作。同時制定の『皇室典範』にも関与した。明治23年、山縣有朋内閣の時に制定の『教育勅語』は、井上と元田永孚の二人で起草されている。

条約改正問題では、外人の内地雑居に断固反対し、治外法権全廃まで妥協を不可として、外国人裁判官など認めなかった。更に、井上は日清戦争開戦の勅語の起草、議会運営への関与等明治国家形成の重要な問題に関与して影響を与えている。

（2015・7・12、大久保啓次郎『井上毅』関連論文）

5 4 益田克徳（ますだ かつのり）1852 - 1903 佐渡 20 歳 司法省八等出仕



実業家にして近代数寄者の祖 益田鈍翁の弟

代々土着与力を以て徳川家に仕えた佐渡奉行所の役人・益田鷹之助の次男として佐渡に生れる。安政元年（1854）父の箱館奉行所転勤に伴い、一旦は江戸の親戚に預けられるが、安政 5 年箱館に移る。安政 6 年、再び父の外国方支配目付役の就任で江戸に戻る。慶応年間、英学、漢学を修め、海軍修業生となつて、榎本武揚の下で、幕府軍として戦い、函館で捕えられ江戸に護送され禁固百日に処される。明治 2 年高松藩に預けられ、慶応義塾に学んだ。この時、一度の試験で 4 階級を飛び越え、福澤諭吉を驚かせたと慶応義塾 50 年史に書かれている。卒業後に高松藩教育掛となる。明治 5 年司法省八等出仕として岩倉使節団司法理事官後発隊 8 人の一員として、渡欧して視察にあたる。

明治 7 年、前島密と共に海上保険条例を作成する。

明治 10 年下野して、司法理事官後発組で一緒だった沼間守一の「嚶鳴社」に入り、自由民権運動に参加する。明治 15 年、大隈重信の立憲改進黨の結党に加わる。

明治 12 年（1,879）渋沢栄一、岩崎弥太郎らと東京海上保険会社を創設して支配人を務める。以降、東京米穀取引所の理事長を皮切りに、渋沢栄一関連の諸会社の創設に次から次へと関わって取締役を歴任する。王子製紙、明治火災、明治生命、日本煉瓦、鐘紡、日本帽子など。でも仕事はそれほど好きではなさそうで、明治 13 年ごろから茶の湯を始めて、明治財界人の中の茶の湯ブームを引き起こした近代数寄者の祖とも言われている。茶人としては、実兄の益田鈍翁（初代三井物産社長、1848 - 1938）が有名だが、弟：克徳の方が師匠である。因みに、岩倉使節団に随行渡米した 5 人の女子留学生の一人で、後に教育者となる永井繁子（1862 - 1928）は妹である。

財界物故傑物伝には、益田克徳を次のように評している。

「維新の変に幕軍に属し、新政府となつては自由民権の説を唱え、三転して米穀取引所その他実業に関係するまで、その経歴の複雑なること渋沢栄一の従兄・渋沢喜作に相似ている。人となり風流温雅、激務を処するかたわら、心を茶道に潜め、造詣することすこぶる深かつたのみならず、造園に通じ、泉石の配置、あんばい等巧妙をきわめ、かねて陶漆器のことに精しく、みずから手を下して製作した」自作の黒楽茶碗：銘・小太郎ヶ淵や茶杓：銘・岩戸は今も名品として珍重されている。渋沢栄一の曖依村荘の作庭プロジェクターは益田と言われ、自らの邸宅にも作庭家・松本幾次郎・亀吉兄弟を起用している。共訳書にグリーンリークの『証拠論抜粹』訳書『夜と朝』（ブルワルド・リットン）等がある。（2015・7・10、先物寸言—この市場を仕切った面々。谷中・上野公園裏路地ツアーのブログなど）

55 沼間守一（ぬま もりかず）1843 - 1890 東京 29歳 司法省七等出仕



幕臣 自由民権運動家 嚶鳴社・東京横浜毎日新聞社創設

天保14年（1843）、江戸牛込にて幕臣・高梨仙太夫の第二子として生まれる。幼名：慎次郎・雅号：不二峰楼主人。弄花生。弘化6年（1849）沼間平六郎の養子となる。明治に入り、慎次郎から守一に改名する。

漢学を儒者・杉原心斉に学ぶ。安政6年（1859）、養父が長崎奉行属員となり同行し、長崎で英国人ゼラールに英学と西洋兵学を学ぶ。文久元年（1861）江戸に戻り、軍艦頭取・矢田堀鴻に海軍技術を学ぶ。同年、幕府の命で横浜のヘボン塾に入門、医学より英語（兵法）に親しむ。慶応元年（1865）、幕府陸軍伝習所歩兵科に入所、フランス士官シャノアンらに仏式兵法を学ぶ。御指図役頭取（大尉、中隊長クラス）から歩兵頭並（少佐、大隊長クラス）に昇進。第二伝習兵隊長として約1500人の教練に就く。

慶応4年（1868）歩兵奉行並に昇進、3月士官約20名を連れ、兄・須藤時一郎と共に江戸を脱走して、戊辰戦争の主戦派として会津で遊撃隊を編成する。あと大鳥圭介らと東北各地を転戦し、遊撃隊の伝習や、農民兵の訓練にあたるが、庄内藩の降伏で、捕縛され江戸に護送される。明治2年、放免されて日本橋で英学指南所を開くが、幕府転覆の人集めと疑われ捕縛されるが、嘗ての敵・板垣退助・谷千城の紹介で土佐藩邸兵士教授方となる。明治4年の廃藩置県後は土佐を出て、横浜で一年間生糸商・両替商を営むが、武士の商法で失敗。明治5年、大蔵大輔井上馨の推薦で租税寮七等出仕、横浜税関詰となるが、物議を醸す人柄がもてあまされて、司法省の江藤に推薦して、司法省七等出仕に転じ、そこで岩倉使節団随員後発隊に選ばれて渡欧する。帰国後、司法省六等出仕。同士と共に嚶鳴社の前身の法律講習会を設立する。明治7年、少判事に、翌年五等判事に任じられ、大阪裁判所詰を命じられるが受けず。河野敏謙の推薦で、元老院権大書記官となり、鶴岡事件（わっぱ騒動）調査にあたり、敏腕を振るう。明治10年の西南戦争勃発で、「義勇兵募集演説会」を開く。明治11年、法律講習会を嚶鳴社と改称。

明治12年、元老院を辞し、『嚶鳴雑誌』を創刊。横浜毎日新聞社を買収して、東京横浜毎日新聞社を設立する。同年、11月東京府会議員に選出される。

明治13年、臨時府会で、副議長に当選。自由党の準備に関わる。明治14年、自由党創立委員となり国会期成同盟の責任者の一人となる。この頃、官有物払下げの情報を得て、新聞や遊説で反対運動を展開する。明治15年には嚶鳴社一派を率いて立憲改進黨に参加するが、のちに大隈や河野が解党に走ると一人反対して党を固守する。自由民権運動を精力的に推進したが、明治23年、明治憲法の成立を見た後、肺炎で死去した。（2015・7・13、『沼間守一』石川安次郎、）

56 名村泰蔵（なむら たいぞう）1840 - 1907 長崎 32歳 司法省七等出仕



ボアソナード招聘とその民法思想導入に多大な貢献

長崎出身の島村義兵衛の子に生れる。幼名：子之松。元健。北村元助の養子となり、北村元四郎となる。長崎のオランダ通詞・名村八右衛門の養子となって、名村泰蔵となったというのが通説だが、名村八右衛門には、名村五八郎（1826 - 1876 - - 新見遣米使節団の首席通詞、1200冊の英書持ち帰り。蘭・英・仏・独語に通じ、泰蔵＝五八郎と勘違いする評伝も多い）という嫡子が江戸で活躍しており、ややこしい。泰蔵がいつ名村家の養子となったのかは、不明である。名村八右衛門の門下生の福地源一郎も一時、養子・名村を名乗り、その後を名村貞次郎元龍（1841 - 1870）と北村元四郎（名村泰蔵）が継いだというので、明治に入ってから元龍の死後かと思われる。

長崎で幕臣オランダ通詞名村八右衛門に、蘭語、そして英語、仏語、ドイツ語を学んだとされる泰蔵は、文久3年（1861）神奈川奉行所詰を命じられる。元治元年（1864）、横浜製鉄所建築掛の通詞として、ドロートル、ジンソライ、仏国技師らと起居を共にする。慶応元年（1865）、軍艦用鉄材購入の為、上海出張。慶応3年（1867）、パリ万国博御用掛を命ぜられ、徳川昭武遣仏使節団先遣隊として渡仏、マルセーユで昭武一行を迎える。明治元年、新政府の長崎県上等通詞を皮切りに。明治2年、仏学局助教、そして外務省文書権大佑。明治5年、司法省七等出仕で、岩倉使節団後発隊の司法省理事官随行に加わる。フランスでは専ら、ギュスターヴ・エミール・ボアソナードの知遇を得て、その講義を聞き、招聘に尽くし、同伴で帰国している。帰国後は任権中法官としてボアソナードの著作・述書の翻訳をすべて手掛けている。『仏国民法契約編講義』『仏国治罪法講義』『仏国刑法講義』『仏国訴訟法講義』や『独逸刑法』の訳書などを何れも司法省翻訳掛として出版されていて、治罪法草案審査委員も歴任して、刑法、治罪法などのフランス法導入に貢献している。尚、明治7年の台湾出兵問題の清国との交渉にあたった大久保利通にボアソナードと共に随行派遣されている。

明治13年、太政官少書記官。明治14年、司法権大書記官となって、参事院院外議官補に任命されている。翌年、司法大書記官に昇進した。

明治19年、大審院検事長に就任、民権派の激化する事件の司法的処理にあたった。

明治25年、大審院長心得に、児島惟謙の後任として任命され、翌年まで務める。

明治27年、貴族院議員に勅選される。退官後は、東京築地活版製造所社長、播但鉄道、東京建物、東京物産の重役なども務めた。

（2015・7・14『名村泰蔵と名村五八郎』（石原千里）、他）

57 川路利良（かわじとしよし）1834 - 1879 鹿児島 38歳 警保助（司法後発）



警察制度創設した日本警察の父

薩摩藩与力（準士分）・川路利愛の長男として、鹿児島比志島村に生れる。

通称：正之進。号：竜泉。「としなが」とも呼ばれた。重野安繹に漢学を、板口源七兵衛に真影流剣術を学ぶ。元治元年（1864）、禁門の変で、長州藩遊撃隊総督の来島又兵衛を狙撃して倒すという戦功をあげ、西郷隆盛や大久保利通から高く評価される。

慶応3年（1867）薩摩藩の御兵具一番小隊長に任命され、西洋兵学を学ぶ。

慶応4年、戊辰戦争の鳥羽・伏見の戦いに薩摩官軍大隊長として出征し、上野戦争では彰義隊潰走の糸口をつくる。東北に転戦し、磐城浅川の戦いで敵弾により負傷したが、傷がいえると会津戦争に参加。戦功により明治2年（1869）、藩の兵器奉行に昇進した。

維新後の明治4年（1871）、西郷の招きで東京府大属となり、同年に権典事、典事に累進した。翌年、邏卒総長に就任し、司法省の使節団後発隊8人の一員として、欧州各国の警察を視察する。帰国後、警察制度の改革を建議し、ジョゼフ・フーシェに範をとったフランス式警察制度を参考に日本の警察制度を確立した。

明治7年、警視庁創設に伴い、満40歳で初代大警視（後の警視総監）に就任した。執務終了後ほぼ毎日、自ら東京中の警察署、派出所を巡視して回り、一日の睡眠は4時間に満たなかったと言う。明治6年の政変で西郷隆盛が下野したが、川路は「私情において誠に忍びないが、国家行政の活動は一日として休むことは許されない」と西郷に従わず、警察に献身を表明した為、内務卿・大久保利通の信頼は厚く、佐賀の乱など不平士族の反乱には密偵を用いて動向を探った。西南戦争でも、薩摩藩出身の中原尚雄ら24名の警察官を「帰郷」の名目で鹿児島に送り込み、不平分子の離間工作を図ったが、中原らは西郷の私学校生徒に捉えられ拷問の末、川路が西郷暗殺の指示をしたとの「自白書」が取られ、大久保と共に川路は薩摩士族から憎悪の対象とされた。

西南戦争が始まると、川路は陸軍少将を兼任し、警視隊で組織された別動第三旅団の長として九州を転戦して、西郷軍を追い詰めるが、途中で旅団長を大山巖に引き継いで、東京に戻る。

明治11年、黒田清隆の妻が急死した際、酒乱の黒田が酔って妻を切り殺したとの噂が立つと、川路が墓を開けて病死と確認したと発表し、これがもみ消し工作と見做されて、川路の庇護者の大久保利通の紀尾井坂暗殺の遠因となったとの見方もある。

明治12年、再び欧州の警察視察旅行に出るが、途中で病を得て、現地で入院加療するが治らず、帰国後まもなく死去した。

（2015・7・15、他）

58 高崎豊麿（正風）（たかさき とよまろ）1836 - 1912 鹿児島 36歳 小議官



幕末の志士 作詞家 桂園派歌人 御歌所初代所長

薩摩藩士・船奉行高崎五郎右衛門温恭の長男として鹿児島に生れる。通称：佐太郎。伊勢。豊麿。左京。号：寶善堂（ウィキペディアは宝義堂）。

嘉永2年（1849）、お由羅騒動（高崎崩れとも）によって、首謀者の父・五郎右衛門が切腹し、正風も連座して奄美大島に流刑となる。2年後赦免され、使番、藩応接掛、京都留守居役附役、山階宮（晃親王）の諸大夫格など歴任。文久2年（1862）、島津久光に随行して上洛。久光の命で会津藩公用方秋月悌次郎に密かに接触し、京から長州藩を追い落とす、文久3年八月十八日の政変（薩会同盟）を成功させる。その功で、京都留守居役を命ぜられるが、慶応3年の西郷隆盛、大久保利通らの武力倒幕に反対して、幼馴染の従兄弟・高崎五六（猪太郎）らと穏健派として土佐藩執政の後藤象二郎らと会談を重ね、平和的大政奉還を支援した為、鳥羽伏見の戦いでは征討將軍の参謀を務めたが、維新後は不遇をかこった。明治2年から明治4年まで、薩摩藩の垂水の業生管理をし、「へし児」対策を施した。明治4年、新政府に出仕、明治5年の左院少議官として、岩倉使節団後発隊に参加して、2年近く欧州諸国を視察した。

明治8年宮中の侍従番長。明治9年御歌掛を務める。若いころ、薩摩藩士で、京都・桂園派の八田知紀（1799 - 1873 香川景樹に学び。明治以降宮内省歌道御用掛）に和歌を学んでいた。師の八田が正風の宮中での活躍の場を作ってくれた。明治10年には明治天皇の歌の点者となる。明治21年には明治天皇のご寵愛を受け、御歌所初代所長に任命され、終生その職に在った。天皇の和歌10万首、昭憲皇太后の作歌4万首を点じたとされる。明治20年、明治維新の功で、男爵を授爵。

明治23年、皇典講究所所長・山田顕義の懇請を受けて、初代国学院院長を明治26年まで務める。明治28年、枢密顧問官を兼ねる。正二位勲一等旭日桐花大授章。

桂園派は古今集の流れを継ぐ、清新優雅な作風で、調べを大事にした。歌集『埋木廼花』『たづかね集』（1926）があり、『高崎正風演説筆記』（1901）『うたものがたり』（1912）の著作がある。又、作詞家として『紀元節』（作曲：伊沢修二・雲に聳ゆる高千穂の高根おろしに草も木も なびきふしけん大御世を 仰ぐ今日こそたのしけれ）。『勸学の歌』（作曲：奥好義）。『水漬く屍』（作曲：吉本光義）を手掛けている。

（2015・7・19 コトバンク、『薩摩人国誌』 他）

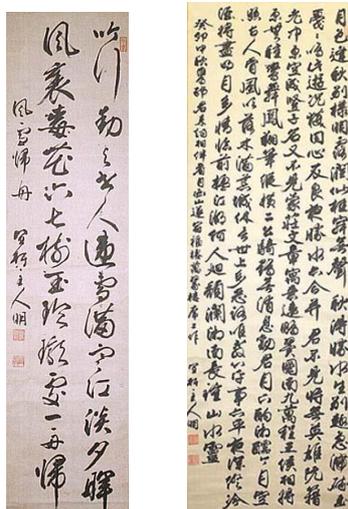


新聞学のパイオニア、統計学の父

上野国(群馬)生まれ。磐城棚倉藩士・岩崎八十吉の四男。白河藩士を継ぎ、大鳥圭介の塾に学ぶ。更に開成所、大学南校に学び、慶応三年慶応義塾に転じ、大村益次郎の知遇を得る。藩籍奉還の際に森有礼の推薦で、行政官制度寮書記官となる。明治4年少議正、明治五年に岩倉使節団後発隊の少議官・高崎正風に随行して、左院派遣・五等議員として渡欧、イギリス議会の調査に当たる。同年ウエストミンスター議会を39回も視察して、帰国後の明治8年に立て続けに、安川繁成視察功程『英国議事実見録』を政府に報告するとともに、エモス(阿謨私)著『英国政治概論』を翻訳出版、『英国新聞紙開明鑑記』を出版する。この開明鑑記は、同年に明治政府が新聞弾圧のための改正新聞紙条例讒謗律を公布して、違反者を投獄した時期に、新聞の必要性、言論の自由、我が国にも英国並みの新聞を期待するとの論を張って、権少外史の役人でありながら刊行したので、「新聞学のパイオニア」(藤原恵氏)との現在の学者の評価もある。官庁が複式簿記を採用した際に『現行官庁簿記法』を編纂している。更に、明治25年には『麦作比較試験報告』を書き、明治31年の第六回衆議院議員総選挙で憲政本党から当選すると、その翌年には『明治三十三年度予算意見』も自費刊行している。かなりの健筆家である。会計監査院部長の時の明治14年大隈重信が統計院長に任命され、その下に矢野文雄が配されて、これから国の諸統計を確立しようとした途端、政変で大隈・矢野が政府から去り、安川が統計院幹事を兼務して、明治15年に第一回『統計年鑑』の発行に漕ぎつけた。彼が「統計学の父」とも呼ばれる所以である。因みに、明治四年の岩倉使節団が回覧中に持参使用した『日本国勢要覧』は、皇室関係、面積(幅員)、歳出入、輸入出、府藩県。鉄道、度量衡、貨幣、神社などごく基本的資料であるが、権少史・安川繁成が編纂したものである。

恐らく、工務省書記官をしていた頃と思われるが、明治11年、新橋・横浜間の鉄道の私営移管を政府に願い出るものがあり、それは否認されたが、安場保和、高崎正風、中村弘毅と安川の四人で、松方正義に掛け合って、政府利子補給の私鉄事業の可能性を探り内諾を取り、全国の地方官会議の際に説明しているが、その縁もあってか後年日本鉄道会社の監査役も引き受けている。東京市参事会員、東京府選出の帝国議會議員、愛国生命保険社長なども歴任している。大隈重信文書、木戸孝允文書、大久保利通文書などにも書簡を残す。港区西麻布の浄土宗・繁成寺を明治17年に安川繁成は開祖となっており、北白川宮能久親王、柳原二位局、秋月子爵、毛利侯の母堂等が、良く参拝されたという。正三位、勲三等瑞宝章。(2014・11・21)

（写真未発見、編集中）



詩書に優れた文人・司法官

佐賀藩儒医・西岡春益の子、逾明（すぎあき、ゆうめい）、子：子学 号：亘軒
 藩校弘道館に学び、万延・文九年間、父親と共に京・大坂に遊学し、負傷志士などの治療に当たる。明治元年、木戸孝允の推薦で、酒田県権知事、ついで東京府参事、東京府権大参事を経て、太政官左院の少議官、中議官となり、明治5年1月横浜を出港し、3月にパリ着、パリの統計学・経済学者モリス・ブロック博士に師事。博士の講義ノート同年11月にパリで合流した岩倉使節団の木戸孝允に見せると興味を示し、早速、木戸と岩倉はブロック博士に会い、「民選議員・民選裁判官など急速な開化には注意を」と助言される。これで、木戸と岩倉の考えが定まったともいわれる。木戸日記には、西岡と木戸はパリで20回も会って議論している。岩倉具視文書には『仏国取調報告書』（西岡逾明）がある。パリ滞在中に左院二等議官に昇進。明治6年9月帰国。高崎正風と連名で『左院拡張論』建白。明治8年判事、更に大審院判事となり、宮城、長崎、函館控訴院院長を歴任した。函館では、函館馬車鉄道（元亀函馬車鉄道）の副社長にも名を連ねている。明治26年病で休職を願い出ている。晩年は家族の住む小田原に隠棲して文墨を友とした。彼の筆になる碑が各地に残る。「江藤新平君遭難址碑」（虎の門）、「深川衛左衛門の碑」（有田—有田焼フィラデルフィア万博立役者：題字：大隈重信、文：久米邦武、書：西岡逾明）。大変な能書家であったようだ。書は亘軒西岡逾明で検索すると見られる。また明治詩抄には『須磨浦』『首夏雑詩』『新年望山』『題成富清風梅花書屋』4篇が掲載されている。大隈重信、江藤新平、大木喬任、山田頭義、岩倉具視、大久保利通との書簡を多数残す。従三位勲二等。詩文『五稜郭』一硝煙海を蔽いて万雷轟く 一死空しく留む烈士の名 今日恩仇両つながら怨なし 春風徐ろに度る五稜郭。『ある文人、司法官の生涯』（直江博子著一孫）がある。

（2014・11・26）

6 1 小室信夫（こむろ しのぶ）1839 - 1898 京都 33 歳 左院少議官（後発隊）



自由民権運動から実業家へ

天保 10 年（1839）京都市与謝郡の生糸縮緬商兼廻漕業の豪商・山家屋の一族、小室佐喜蔵の長男に生れる。幼名：利喜蔵。信太夫。

山家屋の京都支店の監督主任を任されるが、次第に尊皇攘夷運動にのめりこみ、文久 3 年（1863）、平田派国学者が中心となった足利將軍木像梟首事件（京都・等持院の足利尊氏、義詮、義満の三像を三条河原の獄門台に持ち出して曝し首にした事件）に絡み、「高札」に、逆賊との文意の斬奸状を起草したのが小室と言われる。京都守護職に着任したばかりの松平容保に追われて、九州、四国を転々と逃げ回り、最後に徳島藩邸に逃げ込んで自首し、藩邸内で 5 年間幽閉される。

明治維新後、佐幕藩だった徳島藩は、小室を釈放し家老並み（大小姓）に任じて、新政府に徴士として出仕させた。明治 2 年、岩鼻県（群馬県・埼玉県）権知事となり、改革的、改良的県政を行う。更に、岩倉具視の内命で、洲本の稲田問題調停の為、明治 3 年、福島県権知事・立木兼善と共に、福島へ送られて、その後、徳島藩大参事となって事態の收拾にあたった。明治 4 年、左院少議員となる。明治 5 年、元徳島藩主蜂須賀茂韶に同道してとの記事もあるが、実際は岩倉使節団の後発隊・左院の一行として、欧州の視察に出かけて、とくにイギリスの立憲政治を学んで帰る。明治 6 年帰国し、左院三等議員に就任したが、すぐに辞職して明治 7 年の板垣退助、後藤象二郎らの『民選議院設立建白書』の起草に関わり、自由民権運動に傾倒していく。日本初の政党『愛国公党』の設立に参加。徳島地盤の『自助社』を創設。明治 7 年から 9 年にかけて、井上馨から小室宛書簡が数通残されており、自由民権派の後藤や板垣との間の高島炭鉱などの問題の仲介的役割も果していた模様。

明治 15 年以降、北海道運輸の設立。共同運輸の創設役員として参画し、のちに三菱会社と共同運輸が壮絶な競争の末に合併して、日本郵船が誕生する主要な役割を担っている。更に、積極的に実業家としての道を進み、第三百銀行、奥羽鉄道、京都鉄道、小倉製糸など会社の起業に絡んで、それらの重役や社長も務めている。

平安神宮の、拝殿前広場の手水鉢には、明治 28 年貴族院議員 小室信夫寄贈の刻印があり、貴族院議員は明治 24 年より務めている。

（2015・7・20、コトバンク、ブログ『いり豆一歴史談義』、など）

62 鈴木貫一（すずき かんいち）1843—1914 彦根 28 左院五等議官（中議生）

（写真未発見、編集中）

パリ以降の生涯が不明の人

武藤叶翁の四男。彦根藩蔵奉行 350 石の鈴木権十郎の養子となる。藩校：弘道館（文武館）で学ぶ。慶応 2 年（1866）22 歳で、米国へ留学。その経緯と留学先は分かっていない。明治元年米国から帰国。同年、ばら塾で栗津高明と共に、洗礼を受ける。明治 4 年正月、彦根藩立洋学校を自宅・現長屋門に開設。同年 4 月米商人の William Goodman を英語講師に招く。地理、数学、物理学を教えたと言われる。明治 5 年、岩倉使節団後発組左院少議官・高崎正風のフランス視察に随行。長屋門での洋学校は息子・鈴木省三に任せて出立している。パリではフランス公使館に勤務して一等書記官となっている。

太政官官制表によれば、鈴木貫一は、明治 4 年 9 月 28 日—明治 5 年 1 月 19 日正院権少外史を経て、明治 5 年 10 月 8 日—明治 7 年 5 月 2 日まで左院五等議官となっている。つまり、左院視察団として、高崎正風を団長にして、安川繁成、西岡逾明、小室信夫と共に五名で渡欧した時期にあたる。使節団の高崎、西岡、小室らは明治 6 年 9 月には帰国しているので、鈴木はパリ公使館付として残留した模様。

フランスでは鮫島尚信（鮫島尚信・武之助関係文書に 5 通の鈴木貫一書簡がある）、森有礼、上野景範、吉田清成、西園寺公望らと親交があったが、公使館財政問題の責任を取って辞任したと言われる。一説では、公金横領罪とも言われている。

その後の生涯は、明治 31 年（1898）彦根に戻り、英語、仏語、西洋事情を教えたと伝えられるが詳しいことは分からない。晩年、大阪、京都に移徙して、大正 3 年 6 月 29 日に京都田中村（現左京区）で病死したと言われる。享年 72 歳。不遇な半生だったといえよう。 （2014・11・26）

嚶岩倉使節団 理事官と随行員 39名 おわり